

多久川流域の遺跡群

福岡県前原市多久川流域における埋蔵文化財調査報告

前原市文化財調査報告書

第 79 集

2 0 0 2

前原市教育委員会

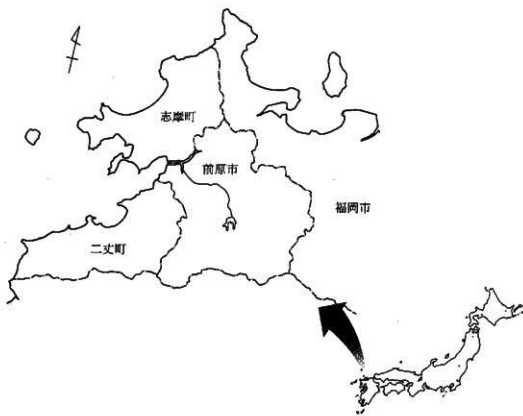


多久川流域の遺跡群

福岡県前原市多久川流域における埋蔵文化財調査報告

前原市文化財調査報告書

第 79 集



2002

前原市教育委員会

序

前原市は近年、福岡市のベットタウンとして発展を続けています。すでに行われているJR筑肥線の複線化、国道202号バイパスの開通に加え、本年度10月には福岡都市高速と西九州道の百道一福岡間が開通、3月には都市高速と九州自動車道が粕屋一福岡料金所間で開通し、前原から九州道までが一本の高速道路で結ばれました。これにより西九州道前原インターから福岡市中心部までは約15分、九州自動車道までは約25分と従来に比べ大きく移動時間が短縮されることとなりました。また、JR筑肥線については、相互乗り入れを行っている福岡市営地下鉄が10月から最終電車の時間を30分繰り下げた運行を始めたことに併せ、新ダイヤの運用を開始したことから、ますます前原市の都市近郊としての位置付けは重いものとなり、今後これまで以上の急激な人口増加と都市化が予想されます。

本報告書に掲載しました多久川は、都市化の影響を受けて人口が増加し続ける下流域と緑あふれる田園風景を残しつつ市民に心の安らぎの場と農作物等を提供している中・上流域との性格の違う2面性を併せ持っています。

土地区画整理事業に先立って、平成3年から7年にかけて発掘調査および試掘調査の行われた多久川下流域北岸に位置する荻浦地区からは、前方後円墳2基、方墳1基を含む古墳群が、今宿バイパス建設に先立ち調査の行われた中流域西岸では奈良時代の遺跡や古墳群が、雷山公民館および雷山小学校敷地内からは中世から近世の時期に属する環濠屋敷の跡などが検出されており、流域に沿って遺跡が高い密度で分布していることが分かります。

この度、本報告書に掲載しました遺跡は、これまで知られていた上記の遺跡に新たな情報を加えることとなりました。本書が当地の歴史を解明する上での一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたってご理解とご協力を頂きました地元の方々から感謝を申し上げます。

平成14年3月31日

前原市教育委員会
教育長 菊竹 利嗣

例 言

1. 本書は、多久川流域において平成元年から13年度まで実施した埋蔵文化財の発掘調査結果をまとめた報告書である
2. 本書に使用した遺構の実測および写真撮影は、Ⅱ-1～2を江野道和が、Ⅱ-3を瓜生秀文、上田健太郎、江野が、Ⅱ-4を林覚が、Ⅱ-5を林、瓜生が行った。
3. 遺物実測は、岡部裕俊、牟田華代子、川上辰子、島影やよい、末益真奈美、友池真由美、榎崎尚子、山崎賀代子、江野が行い、製図は、岡部、牟田、江野が分担して行った。
4. 遺物写真の撮影は、岡部、江野が分担して行った。
5. 本書の執筆は、Ⅰ.はじめに、Ⅱ-5.香力梶原古墳群については岡部が、4.多久元多久遺跡については林が、6.木ノ坂古墳については柳田康雄が、その他は江野が行った。
6. 本書の編集は、岡部の協力を得て、江野が行った。

目次

挿図目次

I. はじめに

1. 多久川流域の地理と歴史的環境 …… 1
 2. 調査にいたる経過 …… 3
 3. 調査の組織 …… 4

II. 調査

1. 蔵持寺ノ前遺跡 …… 5
 (1) 調査の概要 …… 5
 (2) 遺構と遺物 …… 5
 2. 蔵持遺跡 …… 8
 (1) 調査の概要 …… 8
 (2) 遺構と遺物 …… 8
 ①第1地区 …… 8
 ②第2地区 …… 10
 ③第3地区 …… 16
 (3) おわりに …… 17
 3. 多久柿原遺跡・富長浦遺跡 …… 18
 (1) 調査の概要 …… 18
 (2) 遺構と遺物 …… 21
 ①多久柿原第Ⅰ地区 …… 21
 ②多久柿原第Ⅱ地区 …… 22
 (3) まとめ …… 23
 4. 多久元多久遺跡 …… 26
 (1) 調査の概要 …… 26
 (2) 遺構と遺物 …… 28
 ①火葬土坑 …… 28
 ②遺物 …… 28
 5. 香力古墳群—梶原支群— …… 30
 (1) 調査地点の概要 …… 30
 (2) 1号墳 …… 30
 (3) 2号墳 …… 40
 (4) 3号墳 …… 44
 (5) 中近世土坑群 …… 49
 (6) 小結 …… 51
 6. 木ノ坂古墳 …… 55
 (1) はじめに …… 55
 ①調査経過と体制 …… 55
 ②古墳の位置と環境 …… 55
 (2) 古墳の調査 …… 55
 ①墳丘 …… 55
 ②主体部 …… 56
 ③出土品 …… 60
 (3) まとめ …… 64

- 第1図 多久川流域の遺跡群と周辺の主な遺跡
 (1/50,000) …… 2
 第2図 蔵持寺ノ前遺跡周辺の地形 (1/2,500) …… 5
 第3図 蔵持寺ノ前遺跡遺構配置図 (1/150) …… 6
 第4図 蔵持寺ノ前遺跡掘立柱建物および
 出土遺物実測図 (1/80) (1/3) …… 7
 第5図 蔵持遺跡の周辺の地形 (1/2,500) …… 8
 第6図 蔵持遺跡遺構全体図 …… 9
 第7図 蔵持遺跡甕棺および土坑 (1/30) …… 11
 第8図 蔵持遺跡溝および土坑 (1/40) …… 12
 第9図 蔵持遺跡七坑 (1/40) …… 13
 第10図 蔵持遺跡出土遺物 1 (1/8) (1/10) …… 14
 第11図 蔵持遺跡出土遺物 2 (1/3) (1/4) …… 15
 第12図 蔵持遺跡出土遺物 3 (1/3) (1/4) …… 16
 第13図 富長浦遺跡周辺の地形 (1/2,500) …… 18
 第14図 多久柿原遺跡周辺の地形 (1/2,500) …… 19
 第15図 富長浦遺跡遺構全体図 (1/150) …… 20
 第16図 多久柿原遺跡第Ⅰ地区遺構全体図 (1/150) …… 20
 第17図 多久柿原遺跡第Ⅰ地区1号住居出土遺物
 (1/3) …… 22
 第18図 多久柿原遺跡第Ⅰ地区1号住居実測図 (1/80) …… 23
 第19図 多久柿原遺跡第Ⅱ地区遺構全体図 (1/100) …… 24
 第20図 多久柿原遺跡第Ⅱ地区土坑実測図 (1/20) …… 24
 第21図 多久柿原遺跡第Ⅱ地区土坑出土遺物 (1/3) …… 24
 第22図 多久元多久遺跡周辺の地形 (1/2,500) …… 26
 第23図 多久元多久遺跡出土遺物実測図 (1/3) …… 27
 第24図 多久元多久遺跡遺構配置図 (1/150) …… 28
 第25図 多久元多久遺跡火葬土坑実測図 (1/40) …… 29
 第26図 香力古墳群の配置 (1/50,000) …… 31
 第27図 香力梶原1号墳周辺の地形図 (1/300) …… 32
 第28図 香力梶原1号墳墳丘遺存状況 (1/150)、
 土層断面図 (1/80) …… 33
 第29図 香力梶原1号墳石室実測図 (1/60) …… 35
 第30図 香力梶原1号墳前室遺物出土状況 (1/20) …… 36
 第31図 香力梶原1号墳出土馬具実測図 (1/2) …… 37
 第32図 香力梶原1号墳出土馬具・武器実測図
 (1/2) …… 38
 第33図 香力梶原1号墳出土土器実測図 (1/4) …… 39
 第34図 香力梶原2号墳周辺の地形現況測量図 (1/300) …… 40
 第35図 香力梶原2号墳墳丘遺存状況 (1/150)、
 土層断面図 (1/80) …… 41
 第36図 香力梶原2号墳石室実測図 (1/60) …… 42
 第37図 香力梶原2号墳前室出土土刀実測図 (1/4) …… 43
 第38図 香力梶原3号墳墳丘遺存状況図 (1/150) …… 44

第39図	香力梶原3号墳墳丘土層断面図 (1/60) … 45
第40図	香力梶原3号墳石室実測図 (1/60) …… 46
第41図	香力梶原3号墳出土鉄器実測図 (1/2) … 47
第42図	香力梶原3号墳出土土器実測図 (1/4) … 48
第43図	香力梶原遺跡火葬土坑等実測図 (1/30) … 50
第44図	木ノ坂古墳現況墳丘実測図 (1/200) …… 56
第45図	木ノ坂古墳墳丘実測図 (1/150) …… 57
第46図	木ノ坂古墳墳丘土層実測図 (1/60) …… 58
第47図	木ノ坂古墳石室実測図 (1/50) …… 59
第48図	木ノ坂古墳出土鉄器実測図 (1/2) …… 60
第49図	木ノ坂古墳出土土器実測図 1 (1/3) …… 62
第50図	木ノ坂古墳出土土器実測図 2 (1/3) …… 63
第51図	木ノ坂古墳出土土器実測図 (1/2) …… 64

図版目次

図版 1	a. 蔵持寺ノ前遺跡全景 (西から)	図版 11	a. 香力梶原1号墳近景 (西から)
	b. 孤立柱建物 (北から)		b. 香力梶原1号墳奥室部閉塞状況 (直上から)
	c. 出土遺物	図版 12	a. 香力梶原1号墳石室全景 (上から)
図版 2	a. 蔵持遺跡第1地区全景 (北から)		b. 香力梶原1号墳石室左壁
	b. 蔵持遺跡第2地区全景 (北から)		c. 香力梶原1号墳石室奥壁
	c. 蔵持遺跡第3地区全景 (北から)		d. 香力梶原1号墳石室左壁
図版 3	a. 蔵持遺跡2号溝	図版 13	a. 香力梶原1号墳出土馬具
	b. 1号土坑		b. 香力梶原1号墳出土鉄鏃その他
	c. 2号土坑	図版 14	香力梶原1号墳出土土器
	d. 3号土坑	図版 15	a. 香力梶原2号墳全景 (上から)
	e. 4号土坑		b. 香力梶原2号墳前庭部左壁
	f. 7号土坑	図版 16	a. 香力梶原2号墳石室
	g. 9号土坑		b. 前庭部出土大刀
図版 4	a. 蔵持遺跡1号甕棺および6号土坑	図版 17	a. 香力梶原3号墳全景 (北西から)
	b. 3号甕棺		b. 香力梶原3号墳墳丘土層
	c. 2号甕棺蓋	図版 18	a. 香力梶原3号墳石室全景 (上から)
	d. 4号甕棺蓋		b. 香力梶原3号墳出土鉄鏃
	e. 5号土坑	図版 19	香力梶原3号墳出土土器
図版 5	蔵持遺跡出土甕棺	図版 20	a. 香力梶原遺跡A区土坑群
図版 6	蔵持遺跡出土遺物		b. 香力梶原遺跡B区土坑群
図版 7	a. 多久柿原遺跡第I地区全景 (西から)	図版 21	a. 1号土坑
	b. 多久柿原遺跡第II地区全景 (西から)		b. 2号土坑
	c. 富長浦遺跡全景 (北から)	図版 22	c. 3号土坑
図版 8	a. 多久柿原遺跡第I地区1号住居		a. 4号土坑
	b. 多久柿原遺跡第I地区1号住居出土遺物		b. 5号土坑
	c. 多久柿原遺跡第II地区土坑および出土遺物		c. 6号土坑
図版 9	a. 多久元多久遺跡全景 (北から)	図版 23	1 発掘前の木ノ坂古墳 (南西から)
	b. 火葬土坑		2 発掘後の木ノ坂古墳 (西から)
	c. 紡錘車		3 墳丘内土器出土状況
	d. 出土土器	図版 24	1 木ノ坂古墳北側周溝土器出土状況 (西から)
図版 10	a. 香力梶原遺跡全景 (直上から)		2 北側周溝土器出土状況
			3 北から西側の墳丘と周溝 (北から)
		図版 25	1 木ノ坂古墳石室奥壁
			2 石室玄門
			3 石室後道 (西から)
		図版 26	1 木ノ坂古墳石室南側壁
			2 石室北側壁
			3 発掘北側壁

表目次

第1表	香力梶原古墳群出土鉄器計測表 …… 53
第2表	香力梶原古墳群出土土器観察表 …… 54
第3表	須恵器蓋杯一覽表 …… 60
第4表	土師器杯一覽表 …… 61

I. はじめに

1. 多久川流域の地理と歴史的環境

多久川は前原市の南西部、雷山川と長野川に挟まれた低丘陵地帯の谷間を流れる小河川で長野川水系に位置付けられる。現在の川は雷山瀧池に源を発し香力、富、多久を経て、神在で長野川に合流し加布里湾に注ぐ。川の両岸に段丘斜面が形成されているが、その背後には丘陵がせまっているため流域には広い平野がない。流域における調査件数の少なさもあって、これまで周辺で確認された集落遺跡は数えるほどである。

集落遺跡のうち、注目されるのは中流東岸の上鎌子遺跡である。標高20mほどの丘陵上に位置する弥生時代～奈良時代の集落遺跡で、これまでに行われた6次の調査で100棟を超える竪穴住居や竪立柱建物群が確認され、集落西南端の谷底からは弥生時代中期～後期の木器が大量に出土している。近くには弥生期末～古墳前期の甕棺墓、低墳丘墳などが発見された伏龍遺跡もある。

多久川を見下ろす両岸の丘陵上には個性的な古墳が点在する。

河口に近い荻浦遺跡群では、前期～終末期にかけて営まれた前方後円墳2基を含む20基ほどの古墳が確認され、立石1号墳（前方後円墳）からは方格T字鏡、砂魚塚1号墳（前方後円墳）からは大型の雲珠金具、坂ノ下5号墳（方墳）からは圭頭小刀、銀装馬具、金具等が出土している。荻浦遺跡群の東に続く丘陵上でも古墳時代～奈良時代の墳墓群等が確認された大浦遺跡群がある。一帯では古墳時代～奈良時代にかけて墳墓が継続して営まれており、糸島地方における墓制の変遷を知る上で指標となる。

中流西岸の丘陵上には多久口木古墳群がある。1号墳は丘陵西斜面に築かれた円墳で前室が左壁側のみに造り出された複室構造の横穴式石室を有し、前室から須恵器、土師器、鉄製武器、馬具など追葬時に玄室から掻き出された遺物が出土した。2号墳は尾根筋に築造された円墳で、棘葉形杏葉2個が出土した。3号墳は小型の前方後円墳である。

東岸には坂元古墳群がある。1号墳は丘陵上部に築かれた円墳で、5.7mを測る長い羨道が特徴である。2号墳は竪穴系横穴式石室を主体部とする円墳で石室内から鉄製武器、馬具、仿製獣文鏡、銅製銅などが出土した。奥壁に沿って石障が付設される。

香力古墳群（天神前古墳群）では3基の後期古墳が現存し、1号墳は東西方向に主軸をとる全長23mほどの小型前方後円墳である。2号墳は南北方向に主軸をもつ全長35mほどの前方後円墳である。大型の横穴式石室が西向きに開口する（第26図）。

奈良尾遺跡は多久口木古墳群の南西に位置する。弥生時代中期の甕棺墓群、奈良時代の鍛冶遺構、戦国期の墓群などが確認された。蔵持地区では近年の発掘調査で戦国期～近世初頭の環濠居館遺構が相次いで発見されている（蔵持古屋敷遺跡、蔵持境遺跡、蔵持遺跡）。一帯は糸島の中世史に名を刻む原田氏が縁深い土地とされ、小字として古屋敷、北屋敷、小路口など村・屋敷にちなむ地名が各所に残り、界隈ではこの一帯のみが小字界が条里の区割りを強く残した短冊、方形の小区分割となっていることも注意される。香力地区の南東には原田の地名が残っているのも意味深である。今後の調査、研究の進展が期待される。



1. 高持寺ノ窟遺跡 2. 龍神遺跡 3. 高井遺跡 4. 多久橋原遺跡第1地区 5. 多久橋原第2地区 6. 多久元多久遺跡 7. 香力古墳群 B. 本ノ坂古墳
 9. 宮田家ノ塚1号墳 10. 三坂七尾遺跡 11. 龍神志度遺跡 12. 鹿持遺跡 13. 上藤子遺跡 14. 伏龍遺跡 15. 赤民遺跡 16. 秋津遺跡群
 17. 釜塚古墳 18. 東方A-1号墳 19. 東二塚古墳 20. 日新古墳群 21. 龍原門口遺跡 22. 長野丸ノ前遺跡 23. 鹿部山1号墳 24. 津和野地区古墳
 25. 御島野山古墳 26. 池水塚古墳 27. 上町内河原遺跡 28. 坂田遺跡群 29. 夏神社古墳 30. 野宮遺跡群 31. 赤松遺跡群 32. 田代遺跡群
 33. 美多江
 丹波地区遺跡 34. 平原遺跡 35. 三山石ノ崎遺跡 36. フレ塚古墳 37. 日原塚古墳 38. 御塚古墳 39. 真上石打遺跡 40. 藤原1号墳 41. 山北井田1号墳
 42. 三葉崎小輪遺跡 43. 丹波鎌岡遺跡(複製地) 44. 藤山古墳 45. 新山古墳 46. 坂元古墳群 47. 多久口木古墳群

第1図 多久川流域の遺跡群と周辺の主な遺跡 (1/50,000)

文献

- ①「上蓮子遺跡—みえてきた伊都国びとのくらし—」前原市教育委員会 1996年
- ②「伏籠遺跡」前原町文化財調査報告書第4集 1982年
- ③「萩浦」前原市文化財調査報告書第58集 1995年
- ④「今宿バイパス関係文化財調査報告書」前原町文化財調査報告書第38集 1992年
- ⑤「坂元古墳群」前原町文化財調査報告書第2集 1981年
- ⑥「今宿バイパス関係文化財調査報告書」第13集 福岡県教育委員会 1989年
- ⑦「福岡県前原市市内遺跡等分布地図」前原市教育委員会 1998年

2. 調査にいたる経過

本報告書は多久河流域において平成元年度から平成13年度までに調査が行われた6遺跡についての報告を行っている。それぞれの遺跡の調査実施にいたる各事業経過は以下のとおりである。

多久元多久遺跡 (所在地：前原市大字多久元多久733番地 調査期間：平成2年2月2日～3月31日)
調査要因：多久河流域県営ほ場整備事業)

多久河流域県営ほ場整備の対象地の内、遺跡の保存が不可能な地点について調査を実施した。

費力橋原遺跡 (所在地：前原市大字費力 調査年度：平成7年度 調査要因：多久河流域県営ほ場整備)

多久河流域県営ほ場整備事業は平成元年度から7年度にかけて実施された。工事は下流から徐々に上流に向かって進められたが、工事に先立ち文化財有無についての試掘調査を実施し、文化財の所在を確認した地点についてその保存について調整を進めた。最終的に現状での保存が難しいと判断され発掘調査を実施した。

蔵持遺跡 (所在地：前原市大字蔵持810-1 雷山小学校敷地内 調査期間：平成12年11月7日～平成13年1月11日、13年6月4日～7月17日 調査要因：雷山小学校校庭整備、放課後児童クラブ建設)

平成12年度は正門および中庭整備工事に伴い、9月19日に試掘調査を実施したところ弥生時代から近世に至る時期の遺構および遺物が出土し、本調査を実施した。平成13年度は雷山小学校放課後児童クラブ建設に伴い、前年度の隣接地を調査した。

蔵持寺ノ前遺跡 (所在地：前原市大字蔵持寺ノ前719-1、719-10 JA雷山支所敷地内調査 期間：平成13年11月19日～12月27日 調査要因：JA雷山支所建て替え)

JA雷山支所建て替えに伴い、平成13年8月31日に試掘調査を実施したところ中世に属する遺構が検出され、発掘調査を実施した。

多久柿原遺跡 (所在地：前原市大字多久柿原 調査期間：第I地区—平成12年5月19日～7月3日、第II地区—平成12年6月1日～6月26日 調査要因：市道多久蔵持線建設)

市道多久蔵持線の多久地内道路改良工事に伴い第I地区は平成12年5月15日、第II地区は同年5月29日に試掘調査を実施し、遺構を確認し、調査を行った。

富長浦遺跡 (所在地：前原市大字富字長浦 調査年度：平成13年度 調査要因：市道多久蔵持線建設)

市道多久蔵持線拡幅に伴い試掘を実施した結果、遺構が確認されたため調査を実施した。

3. 調査の組織

本調査にかかる組織は以下のとおりである。

調査主体 前原町（平成4年10月より前原市）教育委員会

総括	教育長	河原吉美（平成元年度）	榎木昭生（平成7年度）
		三嶋利彦（平成12・13年度）	菊竹利剛（平成13年度）
文化課長	加嶋怡都城（平成元年度）		
	井上 尚（平成7年度）		
	松井 昇（平成12・13年度）		
文化課参事	小池史哲（平成12・13年度）		
文化財係長	吉村耕治（平成元年度）	川村 博（平成7年度）	
	林 覚（平成12・13年度）		
庶務	文化振興係長	中岡俊二（平成元年度）	清水真澄（平成7年度）
		兄玉照代（平成13年度）	藤井正信（平成12年度）
	主事	濱地 克（平成12・13年度）	
調査	多多元多久遺跡	文化課文化財係主査	林 覚（平成元年度当時）
	香力占墳群—梶原支群—	文化課文化財係主査	林 覚（平成7年度当時）
		同 主事	瓜生秀文（平成7年度当時）
	多久柿原遺跡（第Ⅰ地区）	文化課文化財係主事	江野道和
	（第Ⅱ地区）	文化課文化財係主事	上田健太郎
	富長浦遺跡	文化課文化財係主査	瓜生秀文
	蔵持遺跡	文化課文化財係主事	江野道和
	蔵持寺ノ前遺跡	文化課文化財係主事	江野道和
報告書作成		文化課文化財係主査	岡部裕俊
		同 主事	江野道和
		同 囑託	牟田華代子
発掘・整理作業	青木敦子 青木輝代 青柳玲子 市丸千賀子 井上カツ子 井上ハルエ		
	井上モモエ 大島小夜 川上久美子 川上辰子 川上壺子 川嵯恭平		
	小金丸勲雄 小金丸利枝 柴田タツノ 島影やよい 末益真奈美 杉本美智子		
	高橋マツ子 立山ミヨ子 谷山セツ子 徳永美根子 友池真由美 中田朋子		
	中村照子 榎崎尚子 野村松枝 原ハマツノ 原野スミ 東司テルコ		
	平山富士子 藤木綾子 藤木和子 藤森啓子 騙田昇 本田タツ子 牧井定代		
	松崎和枝 三島久子 三島美也子 溝口英太郎 八木ヤスノ 柳原きみ子		
	山崎賀代子 山崎シナノ 米山八重子		

Ⅱ. 調査

1. 蔵持寺ノ前遺跡

(1) 調査の概要

調査区は東西約36m、南北約15mの長方形を呈し、調査直前まで建物が存在していたため随所に擾乱を受けており、遺構の依存状況は良くなかった。調査区西側からは掘立柱建物、これに伴うと考えられる溝、柱穴が検出された。東側からは柱穴が数基確認された。

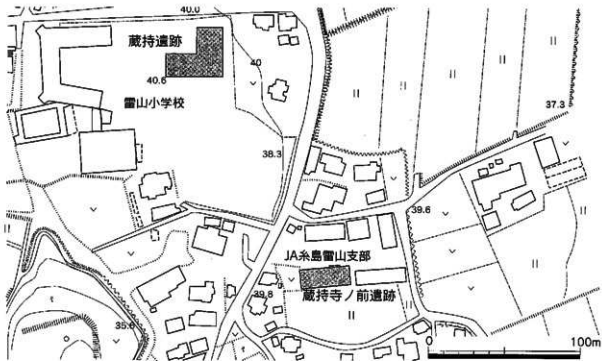
(2) 遺構と遺物

掘立柱建物 (第4図 図版1b) 調査区西側で検出され、3間×4間の規模をもち、床面積は約23.4㎡、柱穴は径30cm以下の小型の建物である。柱穴の中には、裏込めに石を使用したと考えられるもの(P1)があり、ここからは青磁の碗が出土している(5)。

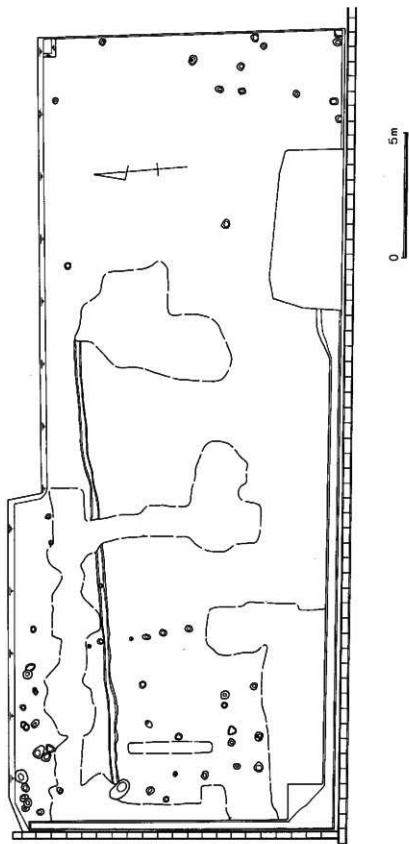
溝 掘立柱建物の北側から溝が10.7mの長さに渡って検出された。遺存状況は悪く、5cm以下の深さしかなかった。掘立柱建物と並列に掘削されているため、これに伴う施設と考えられる。

柱穴 調査区北西側に柱穴が密集して分布しており、中には径52cm、深さ68.5cmの調査区内最大の柱穴が存在することから、北側に現存する駐車場の下に建物が存在するものと考えられる。

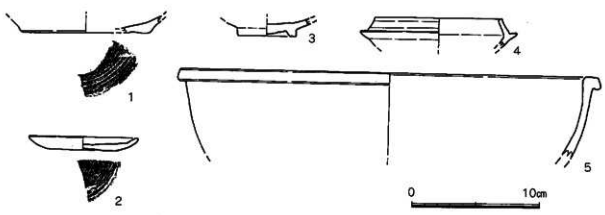
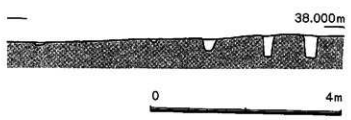
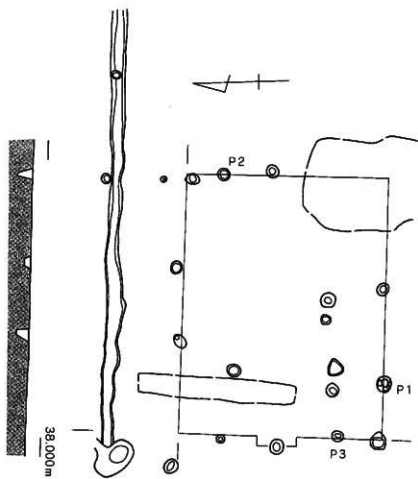
出土遺物 (第4図 図版1c) 1、2は土師皿で共にP2から出土した。3はP3から出土した青磁の碗の高台部分で、高台を削り出しによって整形している。4は須恵器の坏身で調査区の南東部隅の表土から出土した。南側に古墳時代の遺構が存在する可能性が考えられる。



第2図 蔵持寺ノ前遺跡周辺の地形 (1/2,500)



第3図 嚴持寺ノ前堂跡遺構配置圖 (1/150)



第4図 掘立柱建物および出土遺物実測図 (1/80、1/3)

2. 蔵持遺跡

(1) 調査の概要

蔵持遺跡は雷山小学校の校内整備事業および放課後児童クラブの建て替えに伴い調査を実施した。平成12年度に正門と駐車場部分、平成13年度に放課後児童クラブ部分の調査を行い、弥生時代、近世の遺構と遺物が出土した。

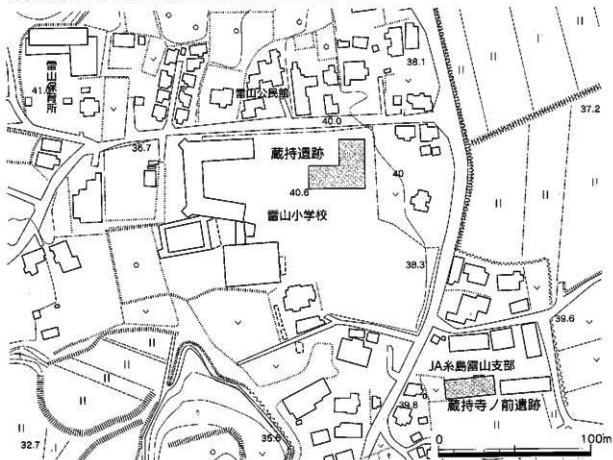
以下、平成12年度調査部分を第1、2地区、平成13年度調査部分を第3地区として報告を行う。なお、第2、3地区は南北につながる調査区である。

(2) 遺構と遺物

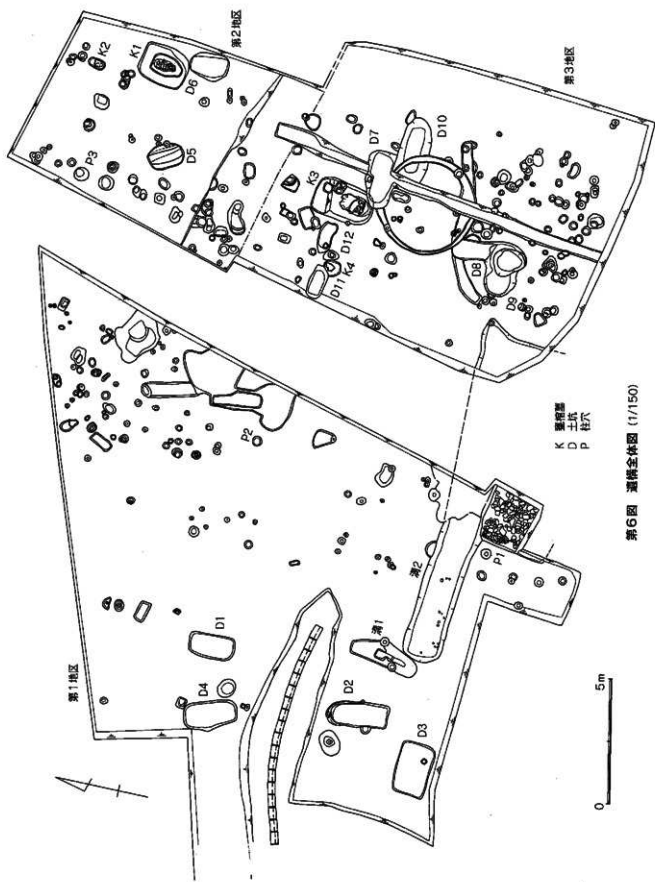
① 第1地区

第1地区は、現在インターロッキング敷きの駐車場となっている部分で、西側で土坑4基、南東部分で近世の溝、北西部分でピットが検出された。

近世溝 (第8・11図 図版3・6) 東西方向に長さ5.5m、幅1.5m、深さ33cmの規模を持ち、東方向5mほどの地点で南に向かって拡張する。拡張部分には礫が大量に投げ込まれており、遺物がこれに混じて出土している。出土遺物は近世の陶磁器類、瓦などが主でありこの時代に掘られたものと考えられる。7は染付碗で口径約10cmの中碗である。外面に梅樹文を、高台外面に二重の蘭線を巡らせ、



第5図 蔵持遺跡の周辺の地形 (1/2,500)



高台内には一重の圓線と裏銘を施す。10は壺の蓋でつまみの部分は失われている。文様は施されていない。11は火入である。体部は直線的に外側にやや開く筒型を呈し口縁端部は内側に折り返して断面が中空で三角形になっている。外面には銅釉を施し、紫灰釉を中央部分に円く配している。13は水注片で把手の周囲のみが残存する。体部はやや扁平な球形を呈しており、内面口縁付近から外面にかけて白化粧土を掛け、外面には鉄絵で草花文様を施している。14は甕で逆し字型口縁を持ち体部外側には鉄釉を口縁部付近には紫灰釉を施している。15は軒丸瓦である。縁が幅広で低く、巴と朱文が大きい。比較的新しい時期のものであることがわかる。16は軒平瓦で唐草文を施す。17は磨石である。

1号土坑(第8図 図版3) 隅円長方形の平面プランを呈し、規模は長さ1.8m、幅96cm、深さ58cmである。出土遺物はなく、遺構の性格、時期等は明らかでない。

2号土坑(第8図 図版3) 北側小口部分が丸く、両側に角を持つ不正長方形の平面プランを呈し、規模は長さ2.4m、幅1.0m、深さ50cmである。出土遺物はなく、遺構の性格、時期等は明らかでない。

3号土坑(第8図 図版3) 隅円長方形の平面プランを呈し、規模は長さ2.1m、幅1.34m、深さは他の土坑と比較して浅く18cmである。出土遺物はないが、土層を観察したところ床面近くに有機物の腐食土と考えられる黒褐色の体積土(①)が確認されており、木棺墓等であった可能性が示唆される。

4号土坑(第8図 図版3) 西側の側壁が張り出す隅円長方形の平面プランを呈し、規模は長さ2.1m、幅1.1m、深さ38cmである。出土遺物はなく、遺構の性格、時期等は明らかでない。

pit1(第11図) 12は土師皿で約1/4が残存していた。底部は糸きりを行う。

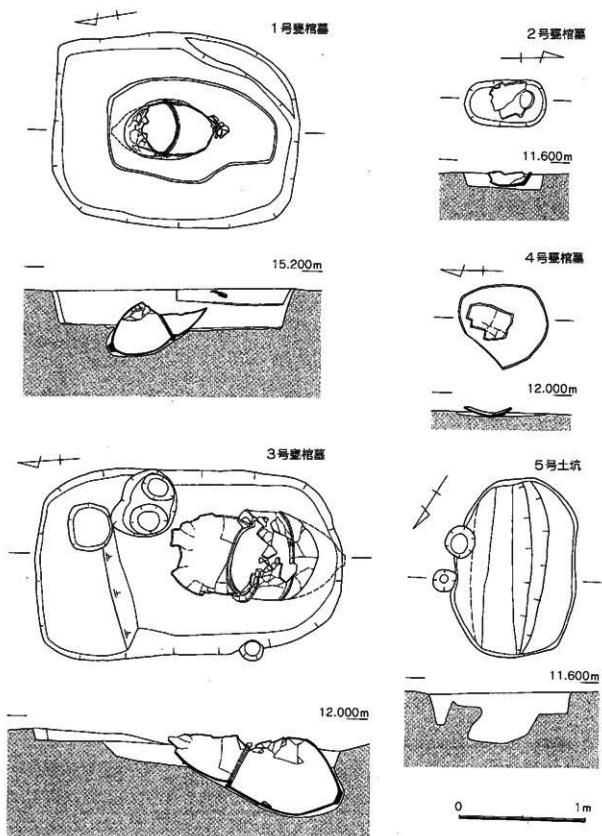
pit2(第11図) 8は染付皿で見込部分に一重の圓線を巡らし、中央にコンニャク印判花文を、高台外側に三重の圓線と内側に一重の圓線と渦福の裏銘を施している。

② 第2地区

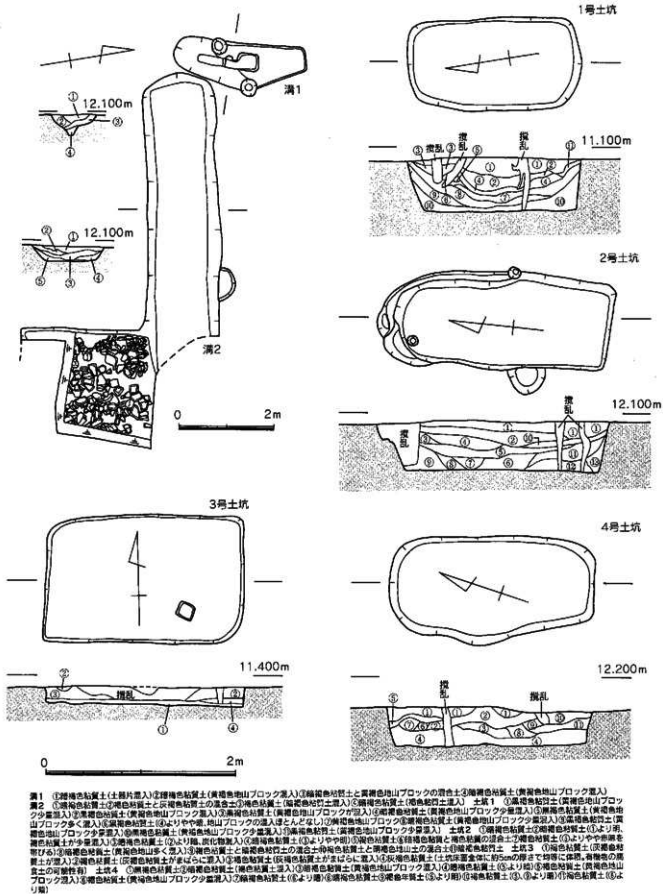
1号壺棺墓(第7図・10図-1、2 図版4・5-1、2) 調査区東側から小児用壺棺墓が出土した。墓坑の規模は長さ1.9m、幅1.5m、深さ56cmで3段に掘り込まれており、壺棺は南方向に頭位を向け31°の角度で埋葬されていた。上甕は底部から体部にかけて削平を受けており、下甕は口縁部が土圧によって一部が破損していた。副葬品はない。

上甕は(1)底部が欠損しているもののほぼ完形である。器高48.8cm、口縁外径38.4cm、口縁内径32cm、胴部最大径39.2cm、底部復元径8.8cm、底部の厚さは3.2cmで上げ底である。口縁は内傾し、逆し字型で、頸部に断面三角形の細い突帯を一条巡らせる。調整は、外面は全体的に風化を受けているため観察が困難で、特に下半部の状況が悪かった。上半部の観察可能な部分での外面は縦のハケ目、内面はナデである。下甕(2)は上甕よりやや大きくほぼ完形である。器高51.6cm、口縁外径44cm、口縁内径34.4cm、胴部最大径40.8cm、底径8.8cm、底部の厚さは3.1cmで上げ底である。口縁は内傾し、逆し字型で、頸部に断面三角形の細い突帯を一条巡らせる。調整として外面は縦のハケ目、内面はナデを施している。

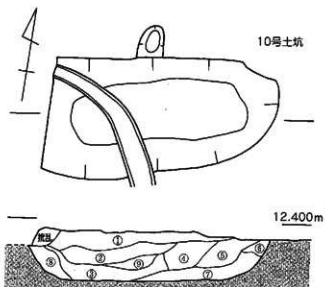
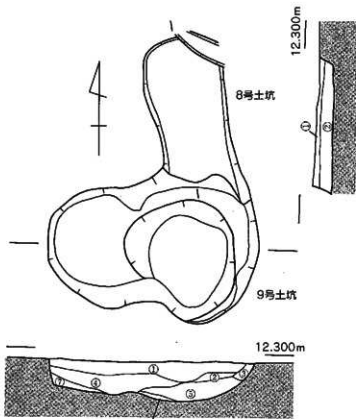
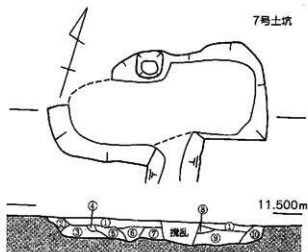
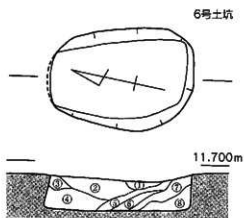
2号壺棺墓(第7図・10図-6 図版4・5-6) 調査区北側から成人用壺棺の底部が出土した。墓坑の規模は長さ63cm、幅37cm、深さ10cmで削平により上甕は失われ、下甕の底部付近を残すのみとなっていた。甕の主軸は小児用壺棺とほぼ同一方向をだが、頭位は逆の北を向き32°の角度で埋葬されて



第7図 墓棺および土坑 (1/30)

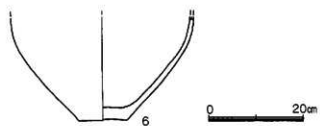
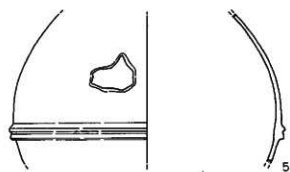
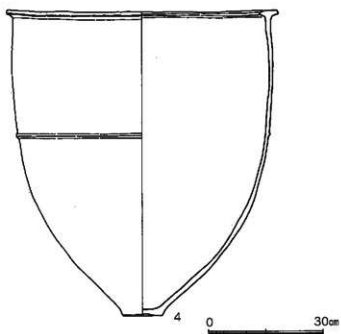
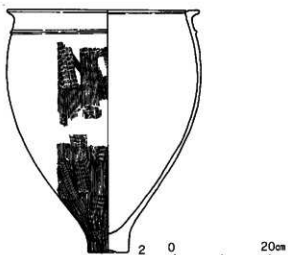
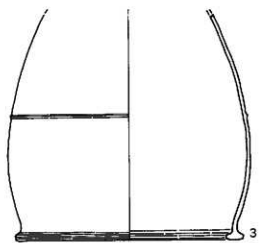
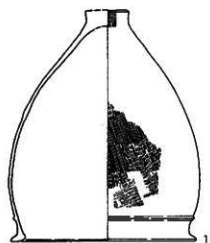


第8図 溝および土坑 (1/40)

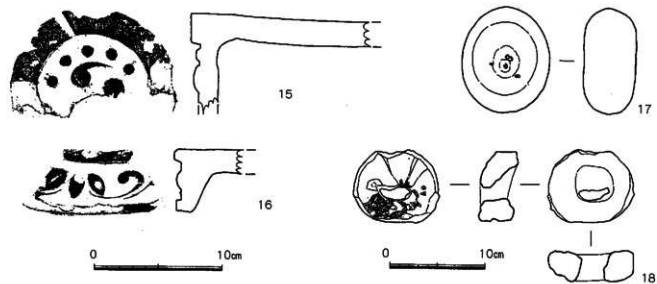
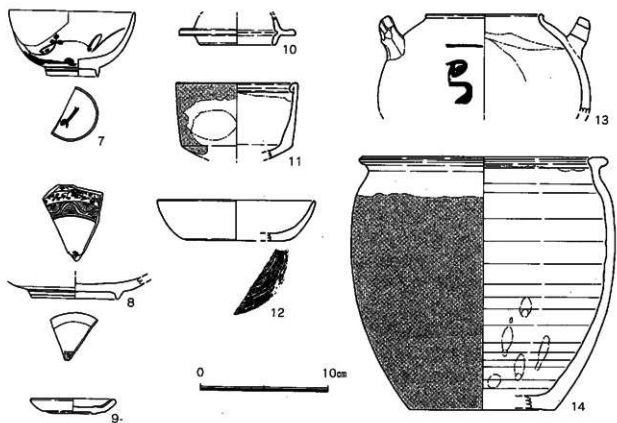


土坑6 ①褐色粘質土(炭化物が混入)②褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)③褐色粘質土④褐色粘質土(②、③よりやや粗)⑤褐色粘質土(黄灰色粘土が混入)⑥褐色粘質土⑦黄灰色粘土と黄褐色地山ブロックの混成土⑧暗褐色粘質土 土坑7 ①暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック混入)②暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)③黄褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)④暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)⑤暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)⑥暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)⑦暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)⑧暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)⑨暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)⑩暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)⑪暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)⑫暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)⑬暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)⑭暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)⑮暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)⑯暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)⑰暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)⑱暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)⑲暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)⑳暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㉑暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㉒暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㉓暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㉔暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㉕暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㉖暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㉗暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㉘暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㉙暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㉚暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㉛暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㉜暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㉝暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㉞暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㉟暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㊱暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㊲暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㊳暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㊴暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㊵暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㊶暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㊷暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㊸暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㊹暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㊺暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㊻暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㊼暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㊽暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㊾暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)㊿暗褐色粘質土(黄褐色地山ブロック少量混入)

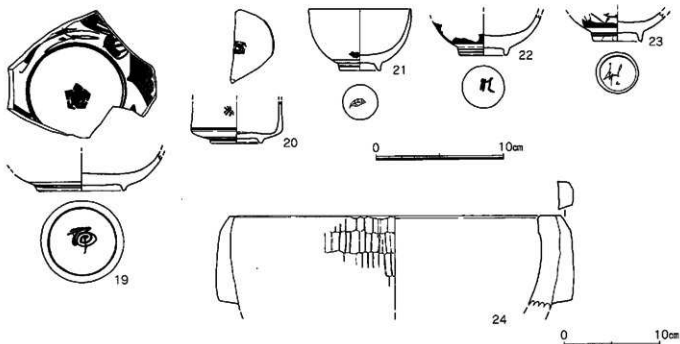
第9図 土坑 (1/40)



第10圖 出土遺物1 (1/8、1/10)



第11圖 出土遺物2 (1/3、1/4)



第12図 出土遺物3 (1/3、1/4)

いた。副葬品はない。底径10cm、底部の厚さ2.4cmでやや上げ底である。調整等は風化のため不明であった。

5号土坑 (第7回 図版4) 調査区南西部で木棺墓が検出された。規模は長さ1.3m、幅93cm、深さ39cmで墓坑は2段掘りをなし、1段目は両側面を急角度に、2段目は西側を緩やかな角度に、東側を袋状にオーバーハングさせて掘り込んでいる。木棺の痕跡、出土遺物等は確認できなかったが、形態から木棺墓の可能性が示唆される。

6号土坑 (第9回 図版4) 調査区東側で出土した小児用甕棺の南側に接するように掘り込まれている。平面形態はやや膨張りの隅円方形をなし、規模は長さ1.5m、幅1.1m、深さ40cmで北側はやや底部が上面に対してオーバーハングする。出土遺物はなく、遺構の性格等は不明である。

pit3 (第11回 図版6) 9は陶器の小皿で銅軸を施している。

③ 第3地区

3号甕棺墓 (第7回・10回-3、4 図版4・5-3、4) 調査区北東部分から合口式の甕棺墓が出土した。上面は大きく削平を受けており、上甕は底部から胴部にかけて大きく削られ口縁部付近で約1/3が残存、下甕は口縁部の約1/4が失われていた。墓坑は、平面形態隅円方形で、甕棺の北側部分に擾乱が入っている。規模は現状で、長さ2.4m、幅1.4m、深さ66cmである。頭位は北向きで21°の角度で埋葬されている。副葬品はない。上甕は残りが悪く、現存高59.1cm、口縁外径60.1cm、口縁内径50.5cm、胴部最大径63.2cmである。口縁は内側に張り出したT字型で、胴部に断面三角形の低く細い一条突帯を巡らせる。下甕は上甕より大きく器高79.8cm、口縁外径71.5cm、口縁内径61cm、胴部最大径68.1cm、底部径11cm、底部の厚さは1.2cmで上げ底である。口縁は内側にやや張り出したT字型で胴部に低く細い一条の突帯を巡らせる。上下甕共に風化のため調整は観察できなかった。

4号甕棺墓 (第7回・10回-5 図版4・5-5) 調査区北東部分、3号甕棺の西側から下甕の体部が出土した。削平により甕棺のほとんどが失われており、内容等は明らかでない。胴部に2条の突帯を巡らしこの上部に外側からの穿孔を行っている。調整等は風化のため不明であった。

7号土坑(第9図 第11圖) 成人棺と10号土坑それぞれに北西側と南東側を削平され、中央部分は水道管により破壊を受けているため残存状況は悪い。平面形態は不正隅円長方形を呈し、規模は現状で長さ2.4m、幅1.1m、深さ18cmである。出土遺物としては、鞆の羽口(第11図-18)、白磁および青磁片、焼土塊がある。

鞆の羽口は高熱により下半分が溶融している。炉に関係する遺物としてこの7号土坑以外にも11・12号土坑、3号壺棺の攪乱部分などから数多くの焼土塊や数点の鉄滓が出土しており鍛冶が行われていた可能性もある。なお、11・12号土坑は壁面に火を受けた痕跡が残っており鍛冶に何らかの関係があるのかもしれないが構造等について不明な点も多く確証は得られなかった。

8号土坑(第9図) 8号土坑は南側を9号土坑に削平される。平面形態は隅円長方形を呈し、規模は現状で長さ1.5m、幅78cm、深さは浅く18cmである。出土遺物はみられなかった。

9号土坑(第9図 図版3) 8号土坑に切り込んで掘削されている。平面形態は不正楕円形で、規模は長さ2.2m、幅1.3m、深さ38cmである。床面は東側が2段に掘り込まれている。出土遺物は、土師皿片、近世陶磁器片がある。

10号土坑(第9図) 西側小口部分を水道管の攪乱により破壊されているので正確な規模等は明らかでないが、平面形態隅円方形で規模は現状で長さ2.4m、幅1.3m、深さ52cmである。出土遺物は、瓦質の搦鉢、染付け皿、近世瓦片がある。

その他出土遺物(第12図 図版6) ここまで述べた遺物の他に小学校正門工事に伴い出土した遺物がある。19は染付皿で内面に牡丹唐草文、見込に二重圏線とコンニャク印判五弁花文を、高台内部に渦福の裏銘を施す。20は筒型の碗で体部はやや内傾しながら直線的に立ち上がり、外面に斜格子文と一重の圏線、高台外側に二重の圏線、内側にコンニャク印判花文を施している。21は11径8.1cmの染付小碗で外面に一重の圏線、高台外側に二重の圏線、高台内側に葉の文様を施している。22、23は碗の小片でいずれも中碗と考えられる。外側に草花文と思われる文様と高台外側に二重の圏線、内側に裏銘を施している。24は滑石製石鍋で把手の周囲のみが出土した。口径は復元で34cmを測り、内湾し、断面が台形の瘤状把手が付き、残存部分の下半部外面には炭化物が付着する。

(3) おわりに

今回の調査では、弥生時代中期、中世、近世の遺構および遺物が出土した。このうち、中世については遺物が比較的少なく、明確な遺構の検出がなかったことから内容は明らかでない。しかしながら50mほど離れた蔵持古屋敷遺跡や同方向に約300m離れた蔵持遺跡で中世の屋敷跡が見つかり、当該地周辺は栄えていた事がわかる。近世については18世紀ごろに属すると遺物を数多く出土した溝が出土したものの、これに伴うと考えられる明確な建物の検出がなかったことが悔やまれる。今後、周辺の調査が進むにつれて雷山地域周辺の歴史像が明らかになることを期待したい。

参考文献

- 九州近世陶磁学会編『九州陶磁の百年—九州近世陶磁学会10周年記念』(九州近世陶磁学会、2000年)。
九州近世陶磁学会編『国内出土の肥前陶磁—東日本の流通をさぐる』(九州近世陶磁学会、2001年)。
中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』(真福社、1995年)。

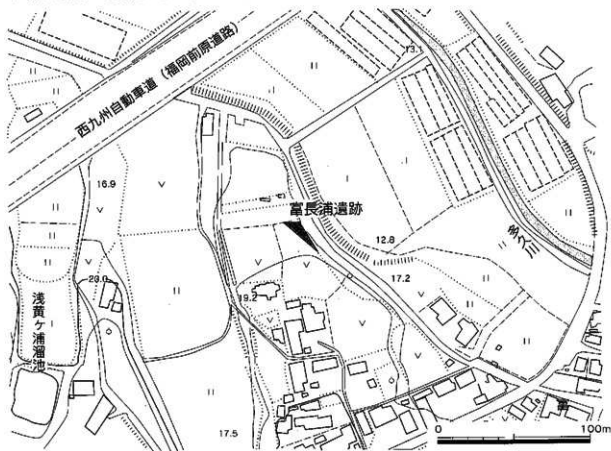
3. 多久柿原遺跡・富長浦遺跡

(1) 調査の概要

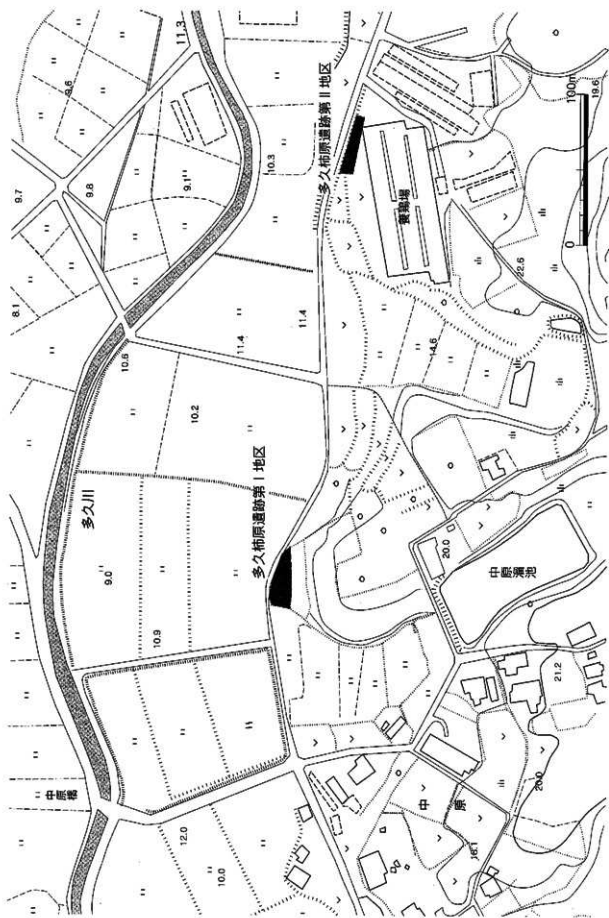
多久柿原遺跡Ⅰ地区 多久川中流域兩岸に位置する丘陵の裾部分に所在する。道路の拡張部分を対象としたため調査区は東西に細長い三角形を呈しており、調査区西側からはいわゆる松葉型型の竪穴住居2軒、柱穴多数、東側からは近世以降に行われた開墾に伴うと考えられる溝が数条検出された。

多久柿原遺跡Ⅱ地区 Ⅰ地区と同一丘陵の東側裾部分に位置する。調査は市道の多久蔵持線の拡幅部分を対象とし、調査区は東西方向に細長い長方形を呈する。調査開始以前に北側は市道、南側は建物の造成工事によって大きく削平されており、調査はこの間の影響を受けなかった一部分に限られた。遺構としては調査区中央部分から円形の土坑、東部分で柱穴が数基検出され、土器器の塊などが出土している。

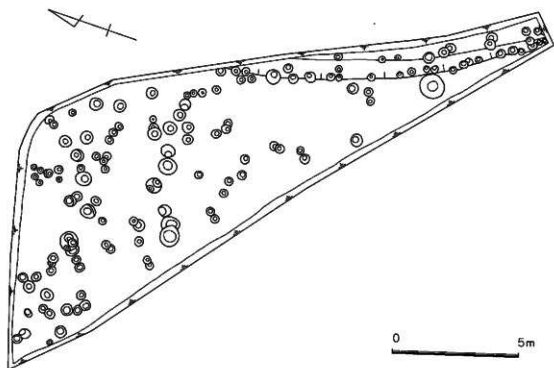
富長浦遺跡 多久川が南から西へ向かって大きく流れを変える部分の南岸に位置する丘陵上に所在する。調査は市道多久蔵持線の拡幅部分を対象とし、調査区は南北に細長い三角形を呈している。川からの比高差は約10mで、道路に面している東側部分は大きく削平を受け、丘陵頂部は畑によって開墾されている。調査以前に表土から多数の弥生土器片が出土したがいずれも小片で、時期および器形を判別することの出来るものは存在しなかった。調査区からは多数の柱穴が検出されたがいずれもプランを判定できるものはなく、出土遺物も存在しない。



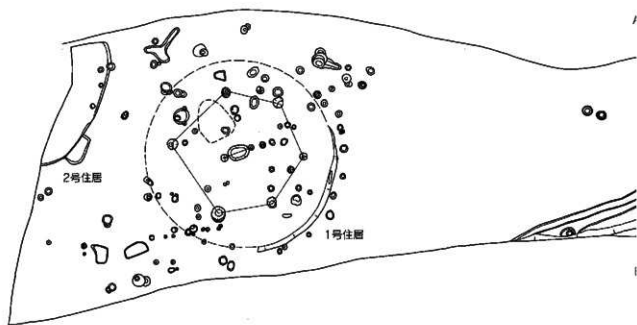
第13図 富長浦遺跡周辺の地形 (1/2,500)



第14図 多久柿原道路周辺の地形 (1/2,500)



第15図 高長浦遺跡遺構全体図 (1/150)



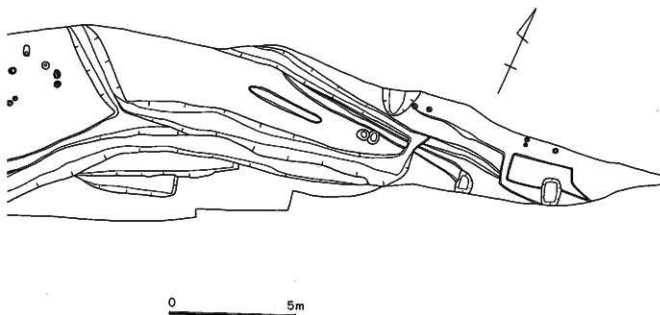
第16図 多々柿原遺跡第I地区遺構全体図 (1/150)

(2) 遺構と遺物

① 多久柿原遺跡第I地区

1号住居(第18図 図版8) 調査区西端近くに位置する1号住居は、床面中央に長楕円形の土坑とこの長辺を挟む2本の柱穴を配するいわゆる松菊里型住居である。住居の平面形態は、壁面が北側斜面下部に向けて大きく削平を受けており、現状では斜面上部に位置する壁が全体の1/4程度しか残存していなかったため正確に判断できないが、円形プランが想定される。規模は推定径約7.4m、面積は約43㎡である。中央には長径1.2m、短径56cmの楕円形土坑が存在し、これを挟み、径28cm、深さ38cm、径24cm、深さ38cmの2本のほぼ同規模の柱穴が配置されている。この他に、床面には多数柱穴が掘削されているが、この内中央土坑からはほぼ同距離に位置する6本の柱穴が主柱穴であると考えられる。6本の主柱穴は不正六角形に配置されており、東側の4本の柱間距離に比べ西側の3本の柱間距離は広くとられている。主柱穴の規模は径が52~24cm、深さが50~30cmである。中央土坑には暗褐色の炭化物の混じった土が流れ込んでいるのが観察されたが、壁面には焼けた痕跡はなく、北西部の床面に焼けた部分があり、ここで火を使用したと考えられる。なお、床面周囲の壁溝および区画溝等は存在しなかった。

当該住居の出土遺物としては床面から土器片再生紡錘車6点(第17図-1~6)、甕の底部(8)、石庖丁の刃部(7)、黒曜石片約200点以上が出土した。1は径約4.3cm、厚さ0.6cmで重さは6.4gである。器面の調整は表裏面ともに風化による剥離が激しく観察できなかった。穿孔は両面から行われている。2は長径3.6cm、短径3.4cm、厚さ0.5cmで重さは7.3gである。器面の調整は表裏面ともに風化による剥離が激しく観察できなかった。穿孔は両面から行われており、体部の反りが強い。3は半分ほどが失われており、復元径4.1cm、厚さ0.7cmで重さは4.4gである。器面の調整は表裏面ともに風化による剥離が激しく観察できなかった。穿孔は両面から行われている。4は3と同様、半分ほどが失われており、復元径4cm、厚さ0.5cmで重さは5.9gである。表裏面ともに風化による剥離が激しく調整は観察できなかった。穿孔は両面から行われている。5は当住居跡で出土した紡錘車の内



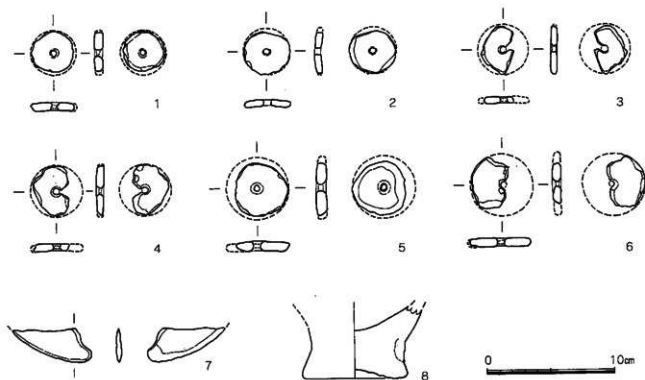
最も大型で、径4.2cm、厚さ0.8cmで重さは15.4gである。器面の調整は表裏面ともに風化による剥離が激しく観察できなかった。穿孔は両面から行われている。6は残りが悪く、2/3ほどが失われていた。現状で復元径4.8cm、厚さ0.6cmで重さは7.1gである。表裏面ともに風化による剥離が激しく調整は観察できなかった。穿孔は両面から行われている。7は、石匱丁の刃部である。厚さ0.4cmを測る。8は、甕の底部である。住居内から出土した土器の中で実測できるものはこの1点のみであった。底部は上げ底で、上方に向かってやや内傾して立ち上がる。調整は内外面ともに風化による剥離が激しく観察できなかった。

2号住居 調査区西端部分から竈穴住居の一部分が検出された。遺構の北および南側は道路の下に存在し、全体を検出することはできなかった。床面には3本の柱穴が存在したがいずれも規模が小さく、住居の主柱穴と認定することはできなかった。遺構の南東部には方形の上坑が接しており住居状遺構より一段高い床面を持っており、上面で切り合い関係がみられなかったことから住居に伴う施設であると考えられる。出土遺物は黒曜石片、土器片等があるが図示できるものはなかった。

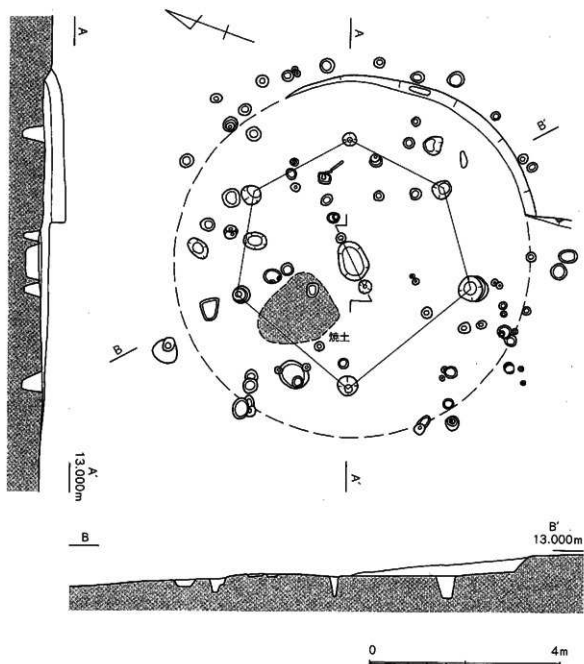
溝 調査区の東側半分から丘陵の等高線に併せるように4本、これらから低い方向へ流れる1本の溝が検出された。断面は底の平らな逆台形を呈し、溝の中からは近世以降の染付けの磁器片が出土している。この時代に開墾のために掘削されたものと考えられる。

② 多久柿原遺跡第Ⅱ地区

土坑 (第20図 図版8) 平面形態は不正円形で上面が削平を受けているため残存状況はよくない。規模は現状で径約80cm、深さ約6cmの浅い皿状を呈する。出土遺物(第21図)は土師器の塊(1、2)と瓦質の塊(3)が出土した。いずれも風化により残存状況は悪い。



第17図 1号住居出土遺物 (1/3)

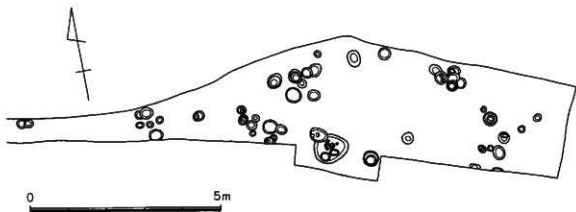


第18図 1号住居実測図 (1/80)

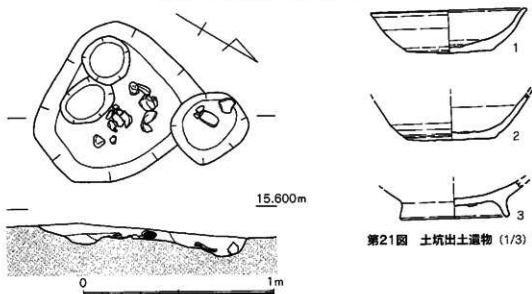
(3) まとめ

以上、多久川中流域に位置する多久柿原遺跡の第Ⅰ・Ⅱ地区と富長浦遺跡について述べた。いずれの遺跡においても遺構の残存状況は良くなかったが多久柿原遺跡の第Ⅰ地区でいわゆる松菊里型に位置付けることができる住居が検出されたので以下若干のまとめを行いたい。

住居の型式 松菊里型住居について初めて明確な定義付けを行ったのは中間研志氏である。氏は当住居の形態が朝鮮半島から流入してきたことを指摘し、松菊里遺跡から検出された住居形態のうち基本的に正円形タイプに類似する日本例を松菊里型住居としてこれを3つのタイプに分類した(中間1987)。中央土坑と両端の2本の柱穴のみを床面に配するもので、夜臼式新段階～板付Ⅱ式



第19図 多久柿原第Ⅱ地区遺構全体図 (1/100)



第20図 土坑裏測図 (1/20)

古段階までのものを「古期松菊里型住居」、前期末以降～中期前半までのものを「新期松菊里型住居」、2本の柱穴の他に4本以上の主柱穴を床面に巡らせるものを「発展松菊里型住居」とした。これに対し、石野博信氏（石野1985）は中間氏以前に逸早くこの住居に着目していたが、国内のみの論考に留まっておられ、中央上坑両端に2本の柱穴を有するものを「神辺型」、2本の柱以外に主柱穴を5・6本持つものを「北牟田型」とした。

近年の研究では、福岡県柏原町江辻遺跡の調査を行った新宅信久氏が、円形プランに類似するもので住居中央に楕円状土坑とこれを挟む2本のピットを有するものを「江辻型」と呼称し（新宅1995）、うち、住居周縁に張り出しピットを持たないものをA類、持つものをB類に分類した。この「江辻型」は住居形態と属する時期から中間氏の「古期松菊里型住居」と多くの点において重複する部分があると考えられ、江辻遺跡検出例からこれを小区分したと言えるかもしれない。

以上に述べた日本側の研究に対して韓国の研究者は松菊里型住居を次のように定義付けている。李健茂氏は当該住居を大きく3つのタイプに分類し、それぞれについて2型式の小区分を行った。中央土坑内側に2本の柱穴のあるものをA型、外側にあるものをB型、柱穴のないものをC型とし、個々について2本の柱穴の他に主柱穴を持たないものを①、持つものを②とした。安在喆氏は中央

第21図 土坑出土遺物 (1/3)

土坑の内側に2本の柱穴を持つものを「休岩里型」、外側に持つものを「検丹里型」とした。これら韓国側の研究者の見解に対して日本では、李氏のA型、安氏の「休岩里型」はほとんど見られず、李氏のC型をいわゆる「松菊里型」の範疇で捉えるのは疑義が生じると考えられている。

今回多久柿原遺跡で検出された1号住居の属する時期は、良好な出土遺物に恵まれていないためはっきりとはいえないが唯一の土器の底部片（第17図-8）から城ノ越式の範疇に含めてよいと思われる。よって、形態と時期から中間氏の「発展松菊里型」、石野氏の「北牟田型」に相当すると思われる。なお、形態としては李氏のB-②型と類似するが、現段階では日韓双方の擦り合わせが完了しているとはいいがたく、今回は明言を避けたい。

中央土坑の使用法 中央土坑は明確に火を受けている痕跡がみられないことから炉以外の使用方法があったと考えられている。中間氏はこれを石器製作のための作業用または脱穀や堅果を粉砕する臼と推測しており、この説は現在、石器製作用としては確認できる出土例が少なく否定的な意見が多いものの臼としては多くの賛同を得ているといえる。これに対し都出比呂志氏は「灰穴炉」を例に、土坑の壁面に火を使用した痕跡がみられずとも炉としての使用は可能と指摘している。

以上に照らし合わせてみると多久柿原1号住居は中央土坑に火を受けた痕跡はなく、内部に炭化物が詰まっていたことから都出氏の灰穴炉と良く似た構造であるともいえる。しかしながら、住居床面に火を受けた箇所があり、一概に言えないが青木遺跡、妻木晩田遺跡など山陰の弥生時代後期～終末期の住居でも床面で火を使用する例があることを考慮に入ると、炉として使用したのでないのは明確である。しかしながら、出土遺物等から中間氏のいう石器製作用臼としての確証はなく使用方法については明言できないが、一つの指標として次のようなことがいえるかも知れない。筆者は、平成11年に山口県内の松菊里型住居について資料をまとめ発表を行う機会を得たが、この席上中央土坑と2本の柱穴の距離が時期を経るに従い開いていくことを示した。そして松菊里型住居が発生した当初の距離の接している時期と終焉の離れた時期のものとは中央土坑および2本の柱の役割はおのずと変化しており、離れたものの中には火を使用した可能性のある例も出現するとした。よって、朝鮮半島内ならびに古期松菊里の時期に作業用穴として用いられた中央土坑も、時を経て西日本各地に広がっていく課程で本米と違った意味合いを持ち、多久柿原遺跡1号住居はまさに変化の過渡期にあったともいえる。いずれにしても未だ資料不足の感は否めないが、前期後半以降の松菊里型住居の資料が増加するのに伴いこの点も解明されていくことを期待したい。

引用・参考文献

- 石野博信「西日本・弥生中期の二つの住居型」（『論集 日本原史』吉川弘文館、1985年）。
- 中間研志「松菊里型住居—我国稲作農耕受容期における竪穴住居の研究」（『東アジアの考古と歴史 中岡崎敬先生退官記念論集』同朋舎、1987年）。
- 鄭 漢徳「東アジアの稲作農耕」（『新版 古代の日本 第二巻 アジアからみた古代日本』角川書店、1992年）。
- 李 健茂「松菊里型住居分類試論」（『韓国史論叢 輝窩許晉遺先生停年記念韓国史学論叢刊行委員会、1992年）。
- 申 鉉東「休岩里・松菊里型住居の発生と展開」（『朝鮮原始古代住居址と日本への影響—朝鮮原始・古代住居址の主要調査報告』雄山閣出版株式会社、1993年）。
- 安 在皓「松菊里類型の検討」（『古文化談叢』第31集、九州古文化研究会、1993年）。
- 都出比呂志「コメント いわゆる松菊里型住居と弥生住居」（『先史日本の住居とその周辺』同成社、1998年）。
- 新宅信久「ハズルの一片—弥生時代早期集落の様相」（『福岡考古』第17号、福岡考古懇話会、1998年）。

4. 多久元多久遺跡

(1) 調査の概要

多久河流域の県営ほ場整備事業にともない対象地域を試掘調査した結果、やむを得ず地形が削られる部分について本調査を実施した。調査区は東西約18m、南北約50mで調査面積は約900㎡となった。

調査地点の北約90mのところを多久川が西流しており、調査区の地形も北（川側）に向かって緩やかに傾斜していた。

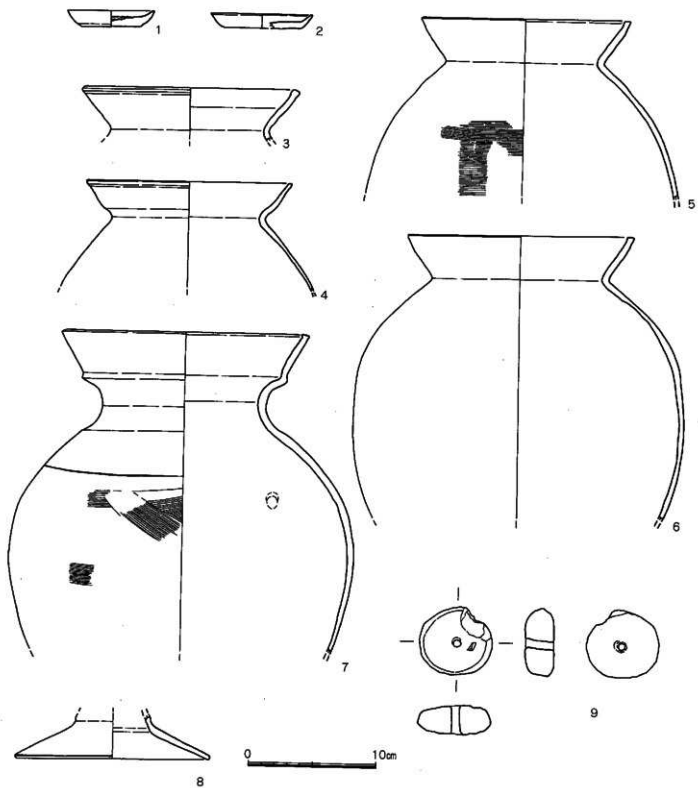
調査の結果、検出された遺構は古墳時代から歴史時代にいたる溝状遺構、井戸、火葬土坑、ピット群などであった。また、包含層からは弥生時代前期から中期の土器が相当量出土し、付近に弥生時代の集落遺跡が存在する可能性がある。

溝状遺構は、東西に走る数条が検出されたが、時代を判断できる遺物が出土したのは、溝状遺構1のみであった。出土したのは、古墳時代前期の土師器である。

井戸は、調査区の南の端に近いところで検出された。現況で深さ105.2cmを測り、底部は径約100cmの円形の平坦面であった。時期を確定できるような遺物は出土しなかったが、埋土には土師皿の小片がみられ、周囲のピットからも同様の遺物が出土しているため、中世のいずれかの時期の



第22図 多久元多久遺跡周辺の地形 (1/2,500)



第23图 出土物实测图 (1/3)

ものであると考えている。また、周囲には、ピットが集中する傾向が見られ、関連する構造物が存在していたと考えられる。

(2) 遺構と遺物

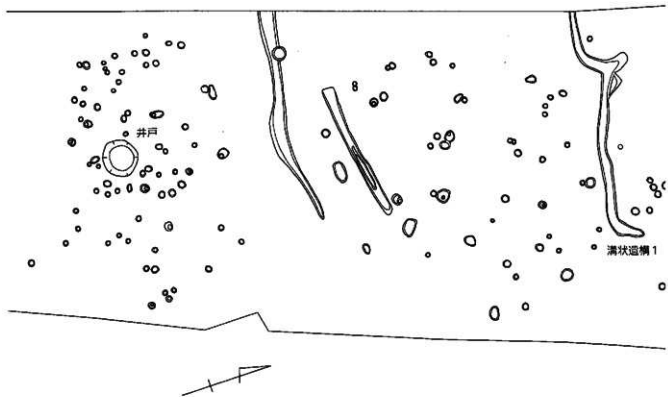
① 火葬土坑 (第25図 図版9)

火葬土坑は、調査区中央で検出された。掘り方は、長さ125cm、幅54cm、深さ22cmを測る。床面には棺を安定させるためと思われる石が2個置かれていた。土坑全体に火によって赤褐色に変色した部分がみられ、遺構面で幅3~4cm、場所によっては10cmにおよぶ部分もみられた。

② 遺物 (第23図 図版9)

1、2は、土師器の小皿で、1は口径6.8cm・底径4.5cm・器高1.3cm、2は口径8cm・底径6cm・器高1.2cmを測る。

3~7は、古式土師器の甕形土器である。3は口径17.2cmを測り、口縁部断面は直線的で端部はやや比厚する。4は口径10.2cmを測り、口縁部はやや内湾しながら立ち上がりわずかに外反して終わる。5は口径16.6cmを測り、外面にハケ目が見られ、内面はケズリののちナデを施してい

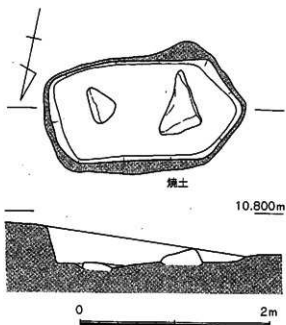


第24図 遺構配置図 (1/150)

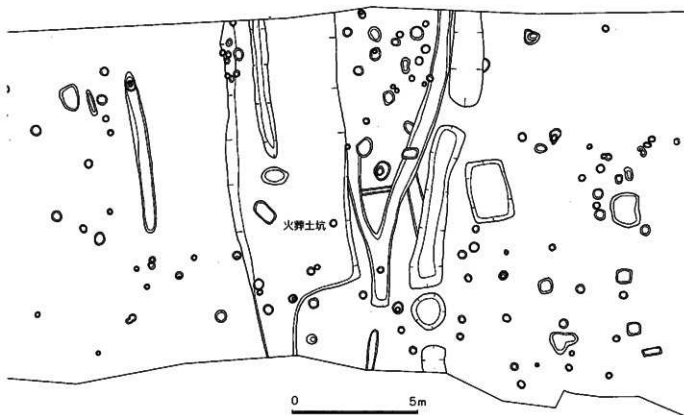
る。6は口径17.8cm・胴部最大径26.1cmを測り、内面はケズリののちナデを施している。7は口径19.4cm・胴部最大径27.1cmを測り、二重口縁の稜は比較的シャープで口縁端部はわずかにつまみ出されている。外面にハケ目が見られ、細い沈線が肩部に施されていて、内面はケズリののちナデを施している。

8は、古式土師器の高杯の脚部で、底径15.4cmを測る。

9は、土製紡錘車で、直径5.8cm・厚さ2.4cmを測り、径0.6cmの穴が穿たれている。



第25図 火葬土坑実測図 (1/40)



5. 香力古墳群—梶原支群—

(1) 調査地点の概要

香力古墳群は多久川上流の香力地区の丘陵上に分布する後期～終末期の古墳群である。これまで川の東西岸に各3基の分布が確認されているが、西岸丘陵上では蜜柑園の開墾等により古墳が破壊された可能性があり、今後この数は調査の進展により増加することが予測される。古墳群は中心的地区の小字をとって西岸を梶原支群、東を天神ノ前支群と称する(第26図)。発掘調査はほ場整備によって丘陵の削平、整地が実施された西岸の梶原支群について実施した。

一帯は近年蜜柑果樹園として開墾、造成されたことにより地形の変更が進んでいたため3号墳以外は墳丘を確認できなかったことから、丘陵上部から表土剥ぎを行いながら、遺構の有無、遺存状態を確認していった。その結果新たに古墳、中近世墓群等を確認し、発掘調査を実施することとなった。

(2) 1号墳

立地と現状(第26・27図)

1号墳は支群の最北端に所在する。丘陵頂部から斜面にかかる傾斜変換線直下、標高48m～50mの地点に位置し、現丘陵裾との比高差は22mを測る。墳丘上面は削平され、外観では古墳の存在を確認することができなかったが、表土剥ぎの過程で石室石材の一部が現れたため、調査を実施した。

墳丘(第28図、図版10b、11a)

古墳は丘陵斜面に半円形に馬蹄形溝を掘削して墳丘域を定め、墳丘基底面を掘削整地した後、石室の構築、盛土を行なったものと推定される。遺存していた墳丘盛土は、石室床面上1m～1.3m間ではやや細かい単位の丁寧な盛土が認められるが、その他の盛土の叩きしめはゆるく、盛土の単位も粗い。馬蹄形溝から推定される墳形は方形、あるいは主軸を石室主軸方向にとる不整円墳で、径は9m前後と推定される。

墓壇(第28図)

墓壇は石室を囲むように隅丸長方形に掘り込まれるが、南部の前庭部では土坑の立ち上がりはない。墳丘図では表示されていないが、墓壇は2段に掘り込まれる。一段目は周溝堀方の50cmほど内側から緩やかに、二段目は垂直に掘られている。1段目と2段目の掘り込みの間には緩斜面があるものの明瞭なテラス面は認められない。墓壇長は7.5m、幅3.5m、深さは1.7m前後を測る。

埋葬施設(第29図、図版11b、12)

本古墳の埋葬施設はN-159°-Wに開口する両袖型複室構造の横穴式石室である。石室は丘陵斜面の等高線に対し約30度の角度をもって斜位に築造される。壁体上半部は石材が抜き取られていた。石室壁体は左壁で5.0m、右壁で4.7mが遺存する。

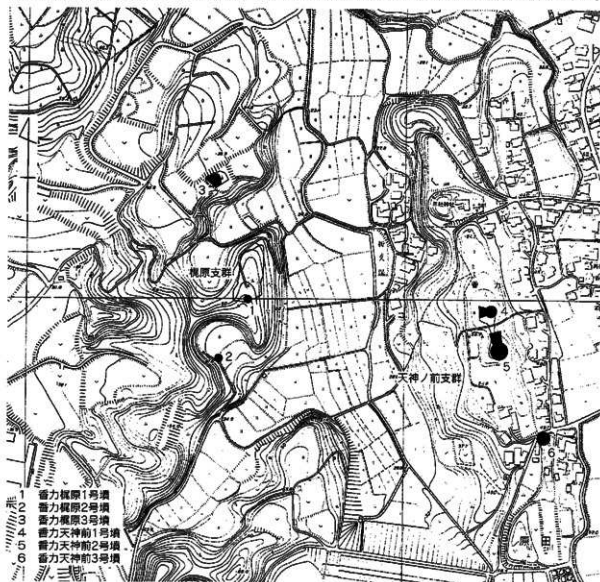
石室は方形プランの玄室に副室、短い横道を接続したもので閉塞施設も遺存する。

床面は上り勾配の臺道、前庭から平坦な狹道に入り、前室を経て玄室にいたる。前庭-狹道、前室-玄室間にはそれぞれ礎石が記されていた。玄室は前室より15cmほど低く整地され、床面には赤色粘質土を厚さ10cmほど敷き詰めている。石室全体を通して敷石は施されていない。

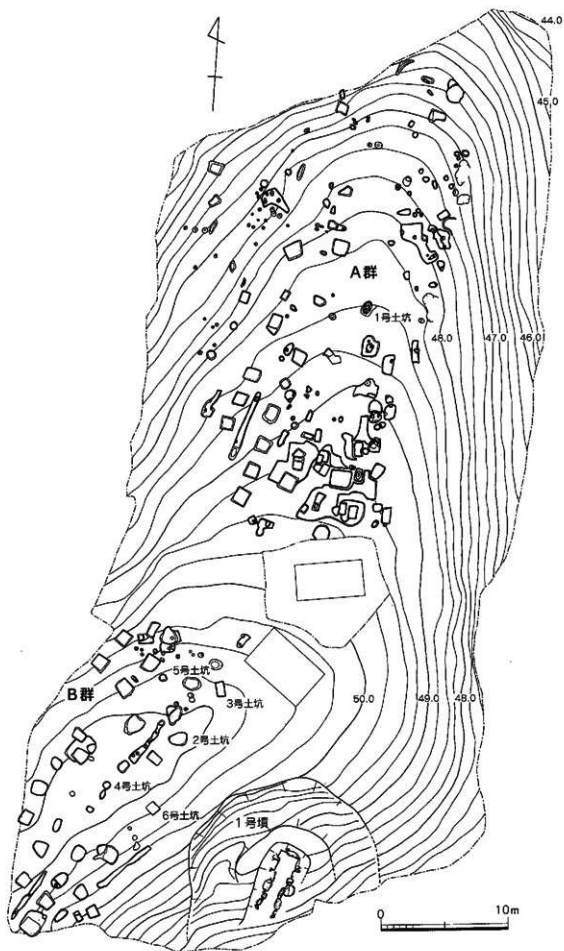
玄室 奥行は右壁で1.7m、左壁で1.75m、幅は奥壁側で1.7m、狹門側で1.95mを測り、奥壁側にややすぼまるものの正方形に近いプランを有す。壁体は奥壁では1個、側壁では各2個、いずれも腰石に花崗岩の大ぶりの割石を据え、隙間には補石を詰めて壁を整える。腰石は床面から90cmの高さで目路が通るように揃えられているが、この目地は副室、狹道、前庭まで揃えられており、墳丘土層断面を勘案すると石室構築時の第一次工程面と考えられる。

玄門袖石は花崗岩の角張った柱状の割石を両袖部に立てる。袖幅は右袖が35cm、左袖が40cmを測る。第2礎石は花崗岩の柱状転石を横に据え、左端の隙間を拳人の塊石で充填する。

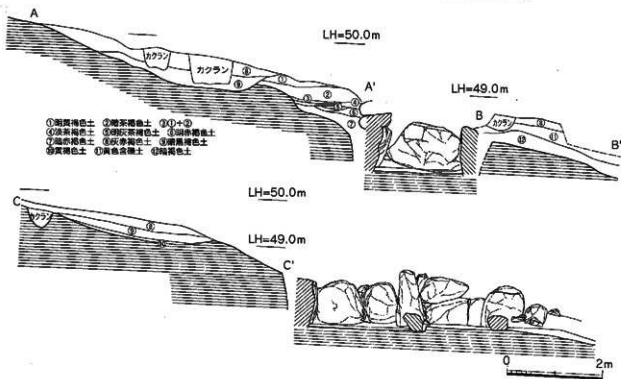
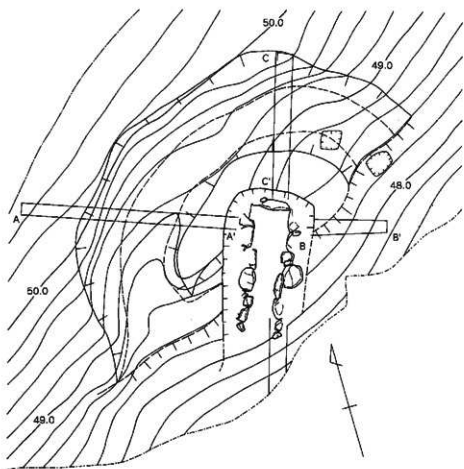
前室 前室は奥行き1.2m、幅1.45mの幅広長方形プランである。玄室と同じく腰石に大ぶりの花崗岩転石を据えるが、玄室腰石他の高さを揃えるため、その上に扁平な転石、割石を積み上げる。



第26図 香力古墳群の配置 (1/5,000)



第27图 晋代槐原1号墳周边地形图 (1/300)



第28図 豊力概原1号墳墳丘遺存状況 (1/150)、土層断面図 (1/80)

羨道 石積み壁の上部に天井石で覆う羨道は右側壁では第1榫石に接して奥行き90cmの花崗岩転石が据えられているのみと考えられる。その南では石は素掘りの墓道壁面にやや大きめの板石を貼り付けており、天井石を架構するのは不可能であることから、前庭部と判断する。

墓道については、遺構が遺存していないため明らかではない。

閉塞施設 第1榫石上に人頭形の塊、角石を積み上げて壁を築き、それから羨道、前庭部にかけて小隙を交えて奥行き1.6mにわたって石を積み上げた閉塞施設が確認された。石積みの間に土砂層が挟まっていて、追葬時に部分的な閉塞石の積み替えが行なわれたものとみられるが、追葬の回数等は不明である。

遺物

出土状況 (第30図)

玄室内は既に盗掘を受けていたためか、見るべき出土遺物はなかった。しかし、前室西壁下の床面から盗掘を免れ、元位置を保った状態で遺物が出上した。遺物は須恵器が床面に据えられ、あるいは横たえられ、馬具、鉄鍔、刀子などがその隙間に散乱していた。須恵器20鉢は割れた破片を集めて重ね上げて置かれていた。追葬時にかき寄せて置かれた状態であったと考えられる。

馬具 (第31, 32図、図版13a)

鏡板、引手壺金具など轡金具の一部、雲珠金具、杏葉、辻金具などが出土した。いずれも前室からの出土である。破損が著しい。

鏡板 心葉形鏡板が2点出上している。1は最大幅8.5cm、最大高8.6cm立間幅2.9cm、高1.5cmを測る。2は最大幅9.2cm、最大高8.9cm、立間幅2.7cm、高1.5cmを測る。透し板は鉄地金銅張りで厚さ3mmほどの鉄板の中央に長方形の1.5×0.7cmほどの衝通し孔を設け、孔の縁から六方に放射状文を配した透し板を重ねる。衝通し孔の縁に4個、外縁に6個左右対称に直径5～6mmほどの半球形銚で留めている。

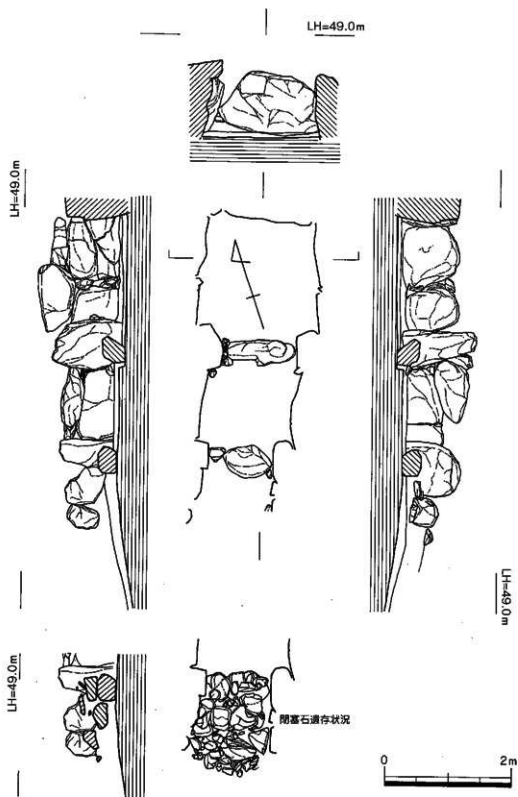
1、2ともに立間に長さ7.3cm、7.2cmの鉄製鉤金具が取り付く。鉤金具には2個の半球形銚が打ち込まれている。銜金具は遺存しない。

杏葉 鏡板とともづくりの心葉形杏葉で台板が欠失し、透かし板のみが遺存する。最大幅8.7cm、最大高8.6cmを測る。地板鉄板は立間の一部を除き遺存しない。鏡板とは外形が酷似するが、透かし板の中央透かし孔が細く孔円形状を呈しており、銚が外縁部にのみに施されているため杏葉とした。

雲珠金具 4は扁平の扁平半球状銚部を有する鉄地金銅張りの雲珠金具で銚部の現存高は3.6cmを測る。半分が欠失しており、銚部は破損変形が著しいが、復元径は10.3cmほどと推定される。側面下半部に3条の突線が削りだされる。

脚部は現状では9脚と推定した。遺存する2箇所の脚部はいずれもコハゼ形で、脚部と革帯とは径7mm半球形銚1個と幅3.5mmの鍔金具によって繋がれる。

辻金具 いずれも鉄地金銅張りである。5は半球状の銚部から十字形に端部U字形の脚部が派生する。銚部の残存高は2.5cm、復元径は5.6cmを測り、側面下半部に4条の突線が挽き出される特徴は雲珠金具と共通する。脚部はコハゼ形で長さ1.7～1.8cm、幅1.7cmほどで中央に半球形銚を打ち皮帯と繋ぐ。6も同形と推定されるが、破損が著しく脚部が欠失していて詳細は不明である。



第29図 雷力橋原1号横石室実測図 (1/60)

引手金具 7・8は引き手蓋金具で、鏡板1・2に皮留金具、皮帯を介して接続されたものと推定される。皮留金具には2個の扁平半球形鋳が2個打たれる。

絞具 9は絞具の軸部の一部と推定される。刺金は遺存しない。

環状金具 10は復元内径2.5cmほどの環状金具の一部であるが詳細は不明である。

飾金具 11～13は長めのコハゼ形を呈する飾金具で、全長3.2～3.4cm、幅1.4cm～1.6cmを測る。13は端部を欠失している。

14は方形飾金具で中央に方形孔があり、鞍金具の可能性はある。15は三角に扁平半球形鋳が打ち込まれる。

装身具 (図版13C、第33図24)

羨道埋土から濃緑色のガラス玉が1点出土している。径1.1cm、厚さ0.7cm、孔径0.35mmを計る。

武器 (第32図、図版13b)

鉄鏃が出土しているが、破損が著しく、全形を知りうるものはない。

鉄鏃 刃部の数から7本が確認できる。16～18は逆刺を有する三角鏃である。17は鋒部が鈍角で、

逆刺が外に開く。19は方頭鏃。20～23は長頭鏃である。

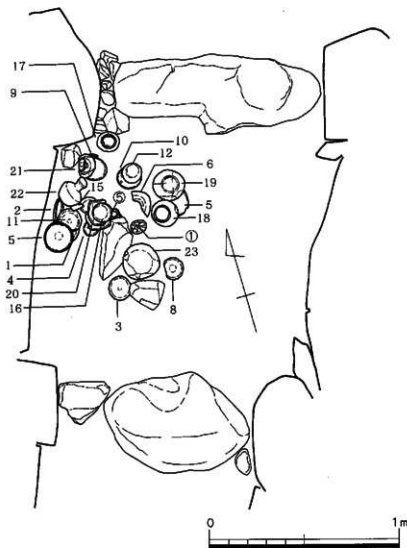
22は鏃身部が柳刃形、他は片刃形である。25～31は頸部片で25～28には寛被が遺存する。

工 具 (第32図32・33、図版13b)

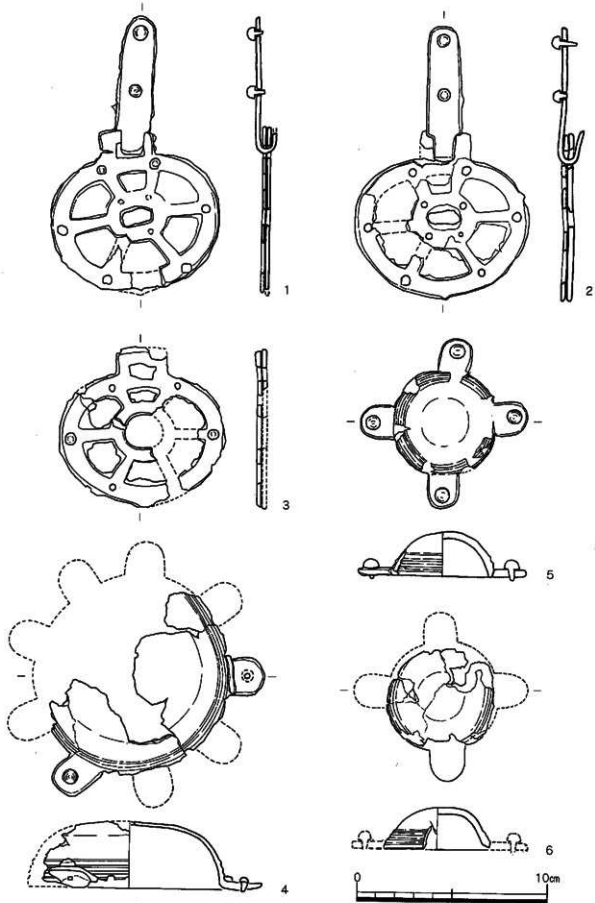
刀子が2点出土した。32には茎部に木質が残っており、木製の柄がついていたと考えられる。

須臾器 (第33図1～22、図版14)

1～3は杯身か蓋か判然としませんが、かえりが小さいので蓋と判断した。1、2は天井部がへら切り未調整、3はへら削りを行なう。いずれも天井外面にへら記号がある。4～7は天井部につまみを有する杯蓋で、4は乳首状のつまみで、かえりを有し、口縁径が小さ



第30図 番力橋原1号墳前室遺物出土状況 (1/20、丸囲み数字は馬具)



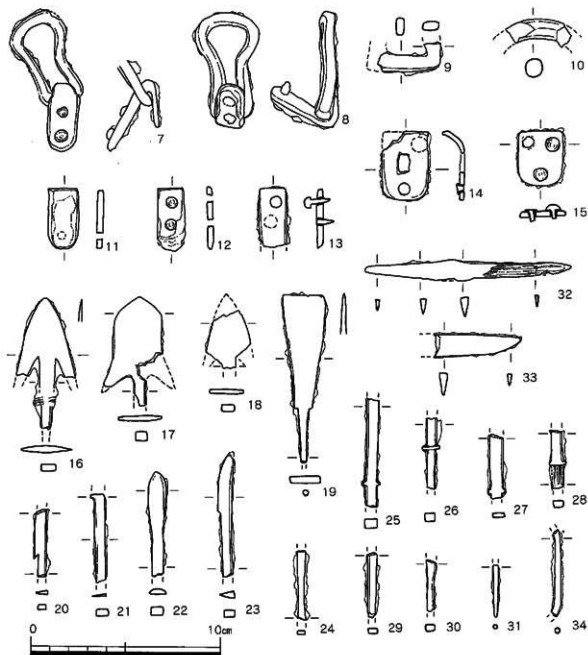
第31图 晋代侯原1号墳出土馬具實測圖 (1/2)

いのに対し、5～7は宝珠状つまみを有し、口径が大きい。

8～20は杯身である。8～10は小さい蓋受けの立ち上がり有する。10は体部中ほどに径8mmの外から穿たれた円孔を有する。11～16は蓋受けの立ち上がりがなくなり、身、蓋が逆転したものの。11～15には外面底部にヘラ記号がある。また、11～13、16には体部中ほどに2～3条の門線がめぐる。17～19は高台がつくもので、17は口径が小さいのに対し、18、19は大口径である。20は大型で器高が高い。

21は短脚の高杯である。

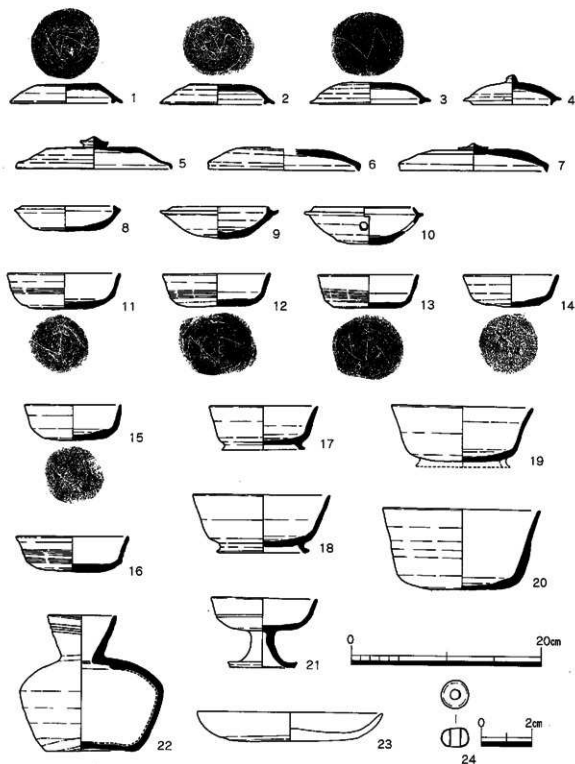
22は平瓶で肩部がやや弧る。体下部は手持ちヘラ削りが施される。



第32図 香川県原1号墳出土馬具・武器実測図(1/2)

土師器 (第33回23、図版14-23)

23は皿である。底部から口縁部にむかって内湾ぎみに立ち上がる。



第33回 香力橋原1号墳出土土器・装身具実測図 (1/4, 2/3)

(3) 2号墳

立地と現状 (第34図)

2号墳は支群の最南端に位置する。丘陵斜面中位の窪地緩斜面に築かれ、標高45m~47mを測り、現丘陵裾との比高差は11mを測る。1号墳と同様に墳丘盛土が蜜柑園造成等によってほぼ消失し、外観では古墳の存在を確認することができなかつたが、表土除去時に石室の天井石が表出したことから古墳を確認した。

墳丘 (第35図、図版15a)

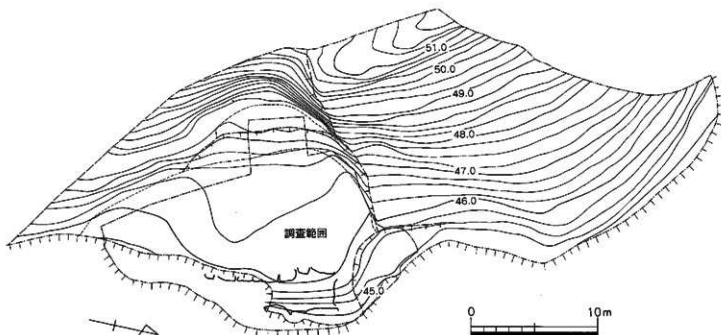
古墳は墳丘西の土層断面の観察結果から東西丘陵斜面に半円形にテラス面を削りだして墳丘域を定めた後、石室を構築しながら盛土を行い、併せて馬蹄形に巡る周溝をつくり出している。馬蹄形周溝底面から推定される墳形は隅丸方形ないしは円墳と考えられ、東西幅は13m前後と推定されるが、調査範囲が限られたため、周溝の延長方向を確定することができず、墳形、規模等については確定することができない。

墓 塚 (第35図)

墓塚は石室を囲むように隅丸長方形に掘り込まれるが、南部の前庭部付近では土坑の立ち上がりはない。墓塚は東西土層観察面では周溝裾から5.6m地点から垂直方向に掘られている。墓塚長は7.5m、幅3.5m、深さは玄室左壁裏で1.4m以上を測る。

埋葬施設 (第36図、図版15b、16a)

本古墳の埋葬施設はN-164.5°-Eに開口する四袖型単室構造の横穴式石室である。石室は丘

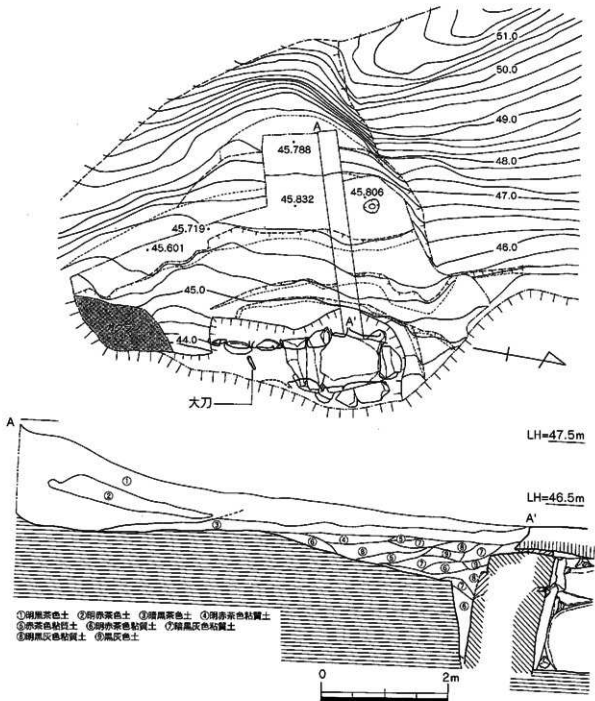


第34図 雷力概原2号墳周辺地形現況測量図 (1/300)

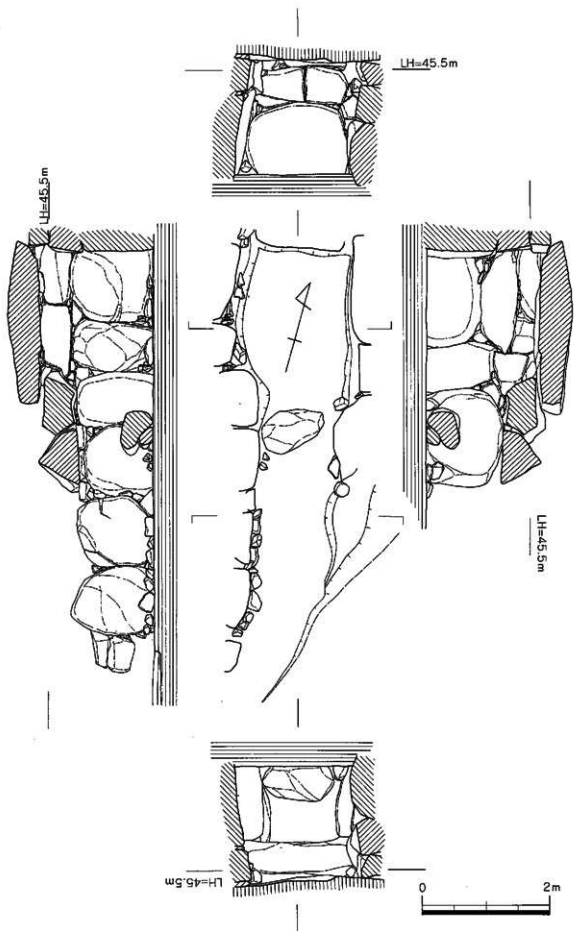
陵斜面の等高線に対し約30度の角度をもって構築されている。

石室は玄室がほぼ完存するものの、羨道部では天井石が玄室側の2枚を残して持ち出され、また斜面下位に面した右側壁側では玄門の1石を残して抜き取られている。石室壁体は左壁で6.7m、右壁で3.65mが遺存する。

石室は長方形プランの玄室に長さ4.15mの長い羨道を接続したもので閉塞施設は遺存していない。



第35図 雷力標原2号墳墳丘遺存状況 (1/150)、土層断面図 (1/60)



第36図 豊力槻原2号墳石室実測図 (1/60)

床面は前庭部から玄室にいたるまでからほぼ平坦である。羨道—玄室間に扁平な転石を据えて柵石としていた。石室全体を通して敷石は施されない。

玄室 奥行は右壁で2.5m、左壁で2.0m、幅は奥壁側で1.8m、羨門側で2.0mを測る不整長方形プランである。壁体腰石は奥壁では1個、側壁では各2個、いずれも腰石に花崗岩の大ぶりな面を整えた転石を据え、隙間には補石を詰めて壁を整えている。腰石は床面から1.3mの高さで目路が通るように揃えられ、その上に0.5mほどの2段目の石積みを行い天井石を架構する。壁は床面から天井部までさしたる持ち送りもなくほぼ垂直方向に積み上げられており高さ1.8mを測る。天井石は柵石を介して花崗岩の扁平な転石1石のみで架構する。

墳丘土層観察では墓竈の掘り方上面のレベルと石室の腰石上面レベルがほぼ等しく、そこまで一気に埋め戻され、その後、天井石の架構まで2工程に分けての盛土が行われていることが確認できる。

玄室側壁の長さが左右で異なるため、両袖部に立てた玄門石の位置が左右で大きく食い違っており、かつ、両袖石が角のない転石であるため、一見すると無袖式の石室のようにみえる。袖幅は右袖が40cm、左袖が45cmを測る。

羨道 左側壁では羨道は扁平な花崗岩転石4個を立てて据えられている。天井高は玄室腰石目路の高さと同じく1.3mであることがわかる。羨道石前面に続いて壁体に貼り付けられた転石があるが、前庭部の張石の一部であろう。これに続いて素掘りの墓道が南方向にのびる。

なお、閉塞施設は遺存していない。

遺物

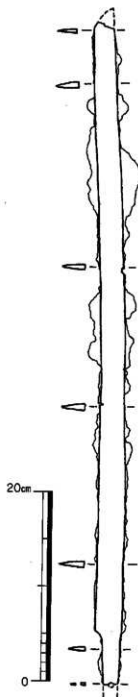
出土状況 (第35図)

玄室、羨道内は既に盗掘を受けていたためか、見るべき出土遺物はなく、わずかに墓道中央でほぼ完形の大刀1本が墓道主軸に対して直交方向に置かれたような状態で出土した。副葬ではなく辟邪的な墓前祭祀時の供献、埋納品と推定される。

大刀 (第37図、図版16b)

茎の先端と切先部を欠失しており残存長70.4cm、刃部幅2.6cm、厚さ7mmを測る。刃部は若干内湾している。刃部は切先から26cmの部位で10°ほど折れ曲がっており、意図的に曲げられた可能性がある。茎部には目釘孔1孔が遺存する。

同じく羨道部からは柄金具とみられる金銅板が数片出土している。小片であるため実測していないが、この大刀の柄飾りであった可能性がある。



第37図 雷力原2号墳墓道出土大刀 (1/4)

(4) 3号墳

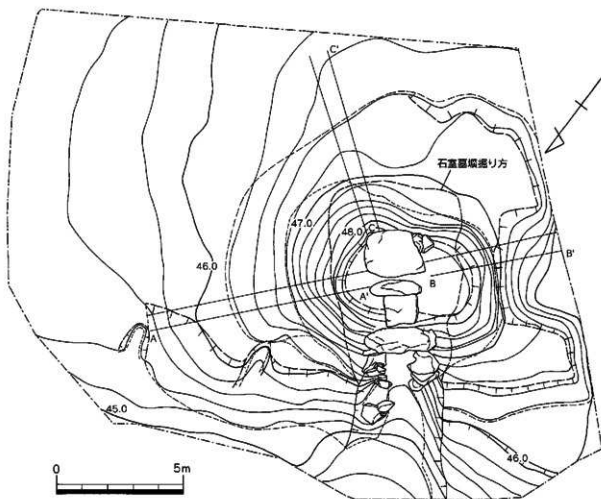
立地と現状 (第26図)

3号墳は大字木売坊に所在する。梶原支群北端の南西から派生する丘陵先端部、標高46mに位置し、丘陵裾との比高差は22mを測る。墳丘は蜜柑園の造成等後世の削平により墳丘周囲の盛土は削り取られ、わずかに石室周囲の盛土が残り、小川墳状を呈していた。

墳丘 (第38図、図版17)

墳丘は盛土が大きく削り取られているため、墳丘として認識できるのは標高47mのコンターラインである。これで復元される墳形は円墳ないしは方墳でその径(一辺)は8.5mほどとなる。しかし、これでは石室掘り方のわずかに外側から盛土が行なわれてることになり、墳丘斜面も急勾配となり、墳形としてかなり無理がある。

そこで、古墳遺存状況図の46.2mの等高線に着目すると墳丘西裾ではラインが直線的に南北に走り、この線を境に傾斜が微妙に変化している。石室墓道東付近でもこの等高線を境に傾斜度が変わっており等高線が石室主軸と直交方向に直線的にのびる。そこで、この46.2mの等高線付近の



第38図 香力梶原3号墳墳丘遺存状況図 (1/150)

傾斜変換線を墳裾とし、この2辺と石室主軸を基準に墳丘プランを復元すると一辺15mほどの方墳に復元することが可能である。

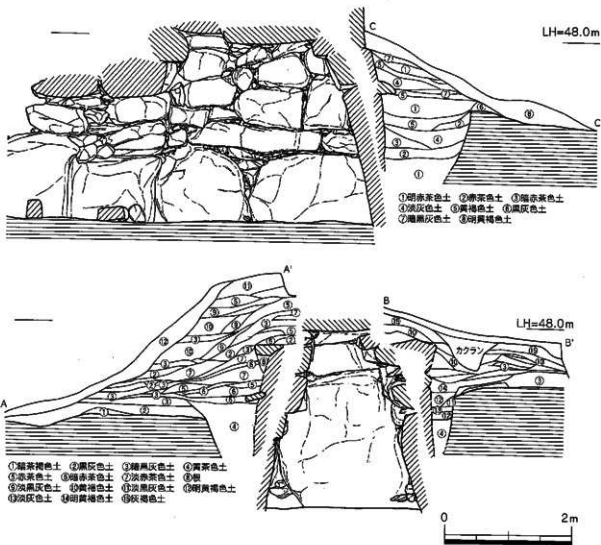
古墳は丘陵頂上部を整地した後、墓墳を掘削し、石室の構築、盛土工を併行して行ったものと推定される。墳丘盛土は大きく石室腰石の裏込め、壁体、天井石の架構、墳丘形成の3工程に分けて行なわれたことがうかがえる。

墓 墳 (第38図)

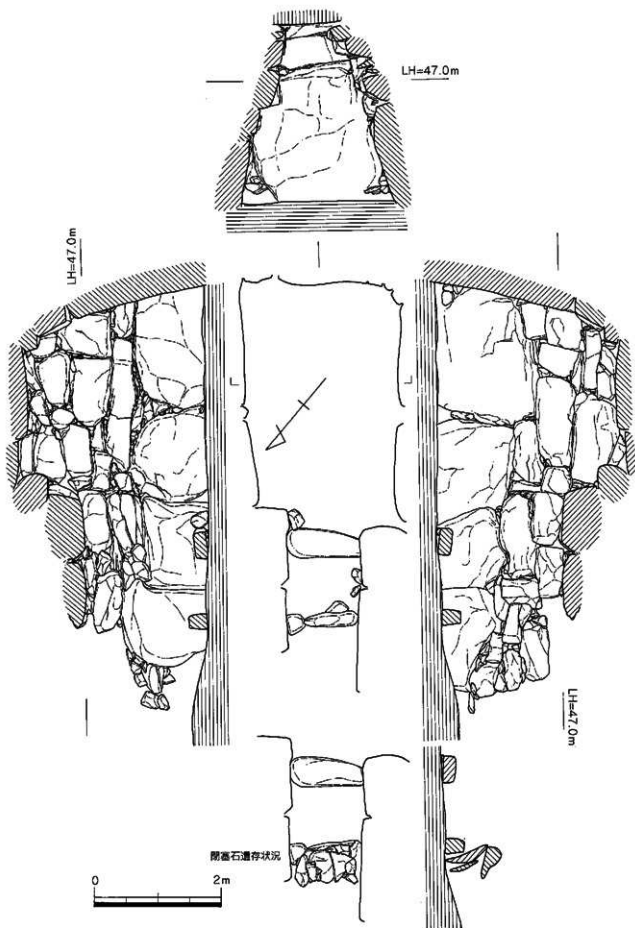
墓墳は石室を囲むように隅丸長方形に掘り込まれるが、北部の石室前面では土壌の立ち上がりはない。墓城長は7.5m、幅3.5m、深さは玄室奥壁裏で1.9mを測る。

埋葬施設 (第40図、図版18a)

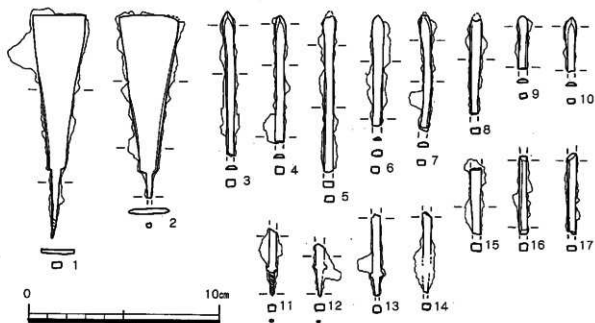
本古墳の埋葬施設はN-36°-Wに開口する両袖型単室構造の横穴式石室である。石室はほぼ完全な状態で遺存していた。石室は玄室の床面から2.2mの高さまで旧表土下で構築される。石室は方形プランの玄室に長さ2mの羨道を接続したもので閉塞施設も遺存する。



第39図 香力槻原3号墳墳丘土層断面図 (1/60)



第40図 雷力権原3号墳石室実測図 (1/60)



第41図 魯力橋原3号墳出土鉄鏃実測図 (1/2)

床面は墓道から前庭に向かって若干下り勾配になり、羨道から玄室にかけてはほぼ平坦である。前庭-羨道、羨道-玄室間にはそれぞれ榎石が配されている。石室全体を通して敷石は施されていない。

玄室 奥行は右壁で3.8m、左壁で3.65m、幅は奥壁側で2.2m、羨門側で2.15m、高さ2.9mを測る長方形プランである。壁体腰石は奥壁では1個、側壁では各2個、いずれも腰石に花崗岩の大ぶりの割石ないしは面を整えた転石を据え、隙間には補石を詰めて壁を整えている。腰石は床面から1.5mの高さで目路が通るように据えられている。

玄門石は花崗岩の角張った箱状の転石を両袖部に立てる。袖幅は左右とも50cmを測る。第2榎石は花崗岩の柱状転石を横に据える。

羨道 羨道は左右壁とも扁平な花崗岩転石を腰石として据え、上方に花崗岩の角石を積み上げて壁体としている。

前庭部 前庭部には壁面に花崗岩板石が貼り付けられている。

墓道 前庭部に続き索掘りの墓道が石室の主軸方位に沿って続く。

閉塞施設 第1榎石上の前面に花崗岩の板石を立てかけ、その上方に花崗岩の塊石を積み上げ閉塞している。築造時の床面から90cmまでしか遺存しておらず、上方は盗掘時にとり崩されたのかもしれない。

遺物

玄室内は盗掘を受け、見るべき出土遺物は少なく、わずかに鉄鏃片が散乱していたのみである。

武器

鉄鏃が出土しているが、破損が著しく、全形を知りうるものは少ない。

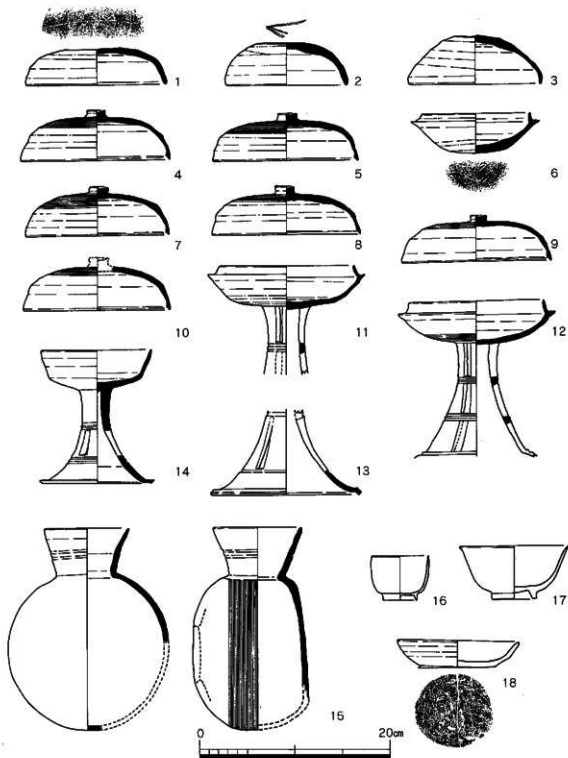
鉄鏃 (第41図、図版18b)

10本が確認できる。1・2は方頭鏃である。1は唯一の完形品である。3~14は長頭鏃で3~

10は蓋身部が柳刃形逆刹を有する。11～13は頸部で冠被が確認できる。

須恵器（第42図1～22、図版19）

1～3は杯蓋である。いずれも口縁端部は丸く収めるが、1は口径が大きく天井部が扁平気味であるのに対し、2、3は天井部が高く丸みを帯び、2は天頂付近のみヘラ削り、3はヘラ切り未調整である。



第42図 香力権原3号墳出土土器実測図（1/4）

4は杯身である。受け部の立ち上がりは小型化している。低部付近のみヘラ削りを行なう。

7～10は有蓋高杯の蓋である。口縁径は15.2cm～15.8cm、いずれも天井部に回転ヘラ削りを行なった後カキメを施し、中窪みのつまみを付ける。

11・12は有蓋高杯である。12は脚部透し孔が3段である。13も同種高杯脚部であろう。

14は無蓋高杯である。脚柱下半にのみ三方透し孔がある。

15は提瓶である。紐掛け突起はない。体部の三分の二にカキメが施される。

その他の遺物 (第42図16～18)

石室からは土師皿、近世陶磁器、寛永通宝等が出土した。近隣集落の言い伝えでは、江戸時代にご法度であった博打が古墳の石室に隠れて開かれていたとされる。これら資料はその言い伝えの証であろうか。

(5) 中近世土坑群 (図版21, 22, 第27図)

1号墳が築かれた丘陵上からは屋根筋を中心に86基の土坑群を検出した(香力梶原遺跡)。土坑群は調査地点中央の現代墓を境に北(A)群と南(B)群に分かれる。なかには土壘墓、火葬土坑などが含まれるが調査期間に限られていたため、全てを精査することができなかった。その多くは中近世の土坑墓、火葬土坑群と推定される。図化することができた6基の土坑について報告する。

1号土坑 (図版21 a, 第43図)

全長1.25m、幅86.5cm、深さ8cmの隅丸不整長方形プランの土坑で、中央に川原石の集石があり、その下にはさらに深さ67cmの2段目の掘り込みがある。人骨等は確認できなかった。

2号土坑 (図版21 b, 第43図)

全長1.45m、幅1.08m、深さ31cmの隅丸不整多角形プランの土坑である。壁面は高熱を受け赤変硬化し、床面の2ヶ所から焼骨、焼土が出土した。火葬土坑と考えられる。

3号土坑 (図版21 c, 第43図)

全長1.22m、幅0.7、深さ10cmの長方形プランの土坑である。床面から、炭、焼骨とともに花崗岩の平石が出土し、石の裏面は焼けていた。火葬土坑と推定される。

4号土坑 (図版22 a, 第43図)

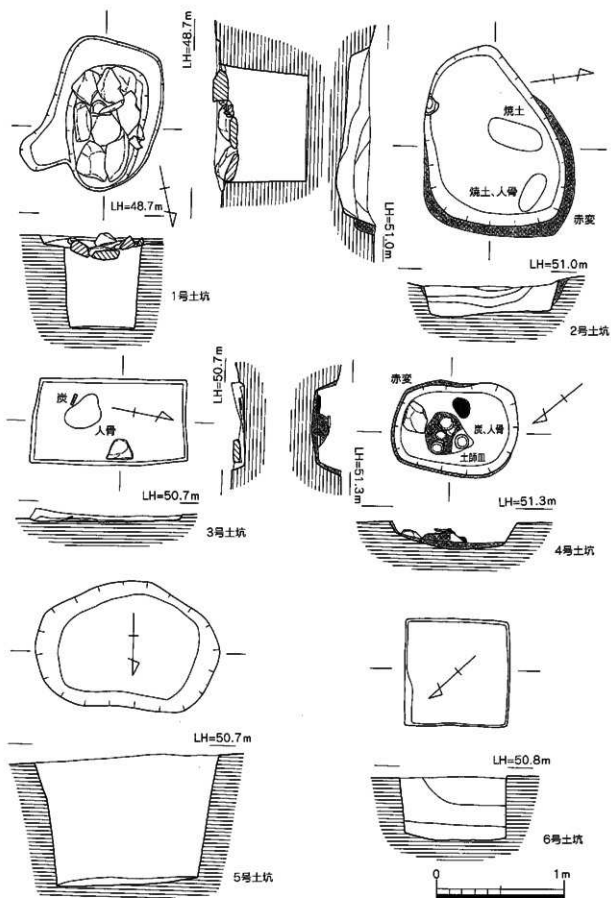
全長98cm、幅75cm、深さ16cmの隅丸不整長方形の土坑である。壁面および床面は高熱を受け赤変硬化していた。また床面中央に焼骨が炭とともに積み集められ、その直上に土師皿が5枚置かれていた。出土土器は管理が不備であったため、現在所在が不明である。

5号土坑 (図版22 b, 第43図)

全長1.47m、幅1.05m、深さ102cmの隅丸不整長方形の土坑である。埋土には炭、人骨片を含む。

6号土坑 (図版22 c, 第43図)

全長0.85m、幅0.83m、深さ50cmの正方形プランの土坑である。



第43图 雷力慎原遗址火葬土坑等实测图 (1/30)

(6) 小結

古墳の築造時期

梶原支群における各古墳の築造時期を検討してみる。

まず1号墳は単室の横穴式石室で立地的には丘陵尾根筋から斜面に移行する過渡的な位置にあり、時間的には6世紀後半から末にかけての築造と推定された。石室は複室構造で筑前地域に6世紀中葉から後半期に肥後地域から筑前地域まで拡散したとされ時間的にも符合する。また、前室から出土した須恵器は追葬時にかき出された物とみられるがその中にTK217段階の杯身(8・9・10)があり、これが古墳の築造、初葬期に近いものと考えられる。また、出土馬具のうち心葉形鏡板、杏葉は桃崎祐輔氏によれば6世紀第3四半期以降のものとして推定されている。このことから1号墳の築造は6世紀の第4四半期と推定した。

2号墳は墳丘の位置が斜面の中位に立地し、玄室規模は1号墳と同規模であるにもかかわらず、石室主軸を地山の等高線と並行して構築されて、墳丘盛土の減量化、石室構築時の土工の省力化が図られている。また、玄室と羨道の境が不明瞭となり、使用石材は1号墳よりも大型化していることなどから石室の構造的には1号墳よりも後出的と判断される。

3号墳は尾根筋に築かれた立地、墳丘を地表に大きく盛り上げる外観から6世紀中葉の築造をうかがわせる。羨道、墓道出土須恵器にはMT85段階の杯身、高杯があり、このセットが初葬期に近いものと考えられる。

これらのことから3古墳の築造順は3号(6世紀第3四半期)→1号(6世紀第4四半期)→2号(7世紀前半)と推定した。

複室構造の横穴式石室

1号墳の埋葬施設は副室構造の横穴式石室である。副室構造の横穴式石室は5世紀後葉に肥後北部菊池川流域で始まり6世紀中葉前後に筑前地域まで拡散したとされる。糸島地方において菅見では前原市の多久口木1号墳と福岡市の徳永アラタ3号墳で確認されており本墳が3例目となる。いずれも築造時期は6世紀後半と推定されている。分布としては多久口木1号墳と香力梶原1号墳が多久川水系に位置し、複数の古墳に複室構造の横穴式石室が採用されたことになる。肥後地域、筑後地域の石室築造技術の影響を受けたものとみられるが、その背景について現状では明らかでない。

東接する福岡平野においては宇美観音浦古墳群などで局地的に副室構造石室が受容された実態もあり、当地域における副室構造石室受容過程・背景の解明についてはこれら周辺地域における受容の様相との比較検討が必要であろう。

心葉形鏡板・杏葉をめくって

1号墳から出土した心葉形鏡板と杏葉は、桃崎氏の集成によれば国内で20数例の出土が確認されており稀少である(註1)。同種馬具を出土した古墳の多くが横穴式石室を主体部とする大型の円墳や前方後円墳からの出土であり、首長墓級の古墳から出土する傾向が認められる。これに対し本古墳は小規模墳で、前者とは趣をやや異にしており、その被葬者像について興味引かれるところである。

多久川水系ではこれまで調査された後期古墳22基中、8基から馬具が出土しており、馬具の出土率が高い。なかでも多久口木2号墳からは金銅装幀葉形杏葉(6世紀後半)、砂魚塚1号墳からは

金銅装大型雲珠金具（6世紀中葉）、坂ノ下5号墳からは銀装辻金具（6世紀末～7世紀前半）が出土するなど馬具優品の出土が目を引く。さらに大刀や鉄鏝など何らかの武器の副葬が確認された古墳は14基にのぼる。散在する古墳（群）から馬具の優品や武器が高い確率で出土しているのが、多久川水系の後期古墳（群）の特徴といえる。この解釈としては後期群集墳に副葬された遺物が古墳に埋葬された人々の生前の生業を反映するとの仮定に立てば、多久川水系の古墳（群）の造営集団が軍事、あるいは馬の管理等に関わった集団であった可能性を指摘することができるだろう（註2）。

一方、加布里湾に面した坂ノ下遺跡からは丘陵高所の平坦な花崗岩上で一組の鍍金具が出土した。付近からはTK10段階の須恵器、重圏文鏡なども出土しており海を臨んで行なわれた岩上祭祀に関連する遺跡である可能性が高い（註3）。隣接する石川1号墳からは皮袋形須恵器が出土し、また、多久11木2号墳の棘葉形杏葉は、わが国出土の同種馬具のなかでも古式に属し新羅製である可能性が高いという（註4）。砂魚塚1号墳では墳丘裾から出雲の花仙山産と推定される碧玉製の半製品も出土している。

このように外来系遺物が多久川流域一帯から出土する様相は、多久川水系の古墳（群）の造営集団が海上交通にも関わったことも匂わせる。6世紀～7世紀代におけるわが国と朝鮮半島の政治的緊張関係のなか、「日本書紀」に記載されている継体・欽明期の百済への馬匹の供与記事などともからみ（註5）、今後とも多久川流域の古墳には注意を要する。

註

- 註1 桃崎祐輔「風返稲荷山古墳出土の馬具の検討」『風返稲荷山古墳』2000年 陸ヶ浦町遺跡調査会、日本考古学協会
- 註2 宮田浩行「朝鮮半島に渡った筑後の馬」『小郡市史』遺史編 2001年 小郡市市史編纂室
- 註3 岡部裕俊『萩浦の文化財』—前原市萩浦地区上地区面整理事業に伴う埋蔵文化財調査の速報2— 1993年 前原市教育委員会
- 註4 桃崎祐輔氏からご教示いただいた
- 註5 註3に同じ

第 1 表 香力梶原古墳群出土鉄器計測表

残存値 (単位: cm)

馬具

遺構	番号	図版	種別	全長	幅	厚さ (高さ)	備 考	
1 号 墳	1	13a	鍔板	14.6	8.8	0.5	心葉形	鉄地金鋼表 鍔金具 新留め 皮留め金具遺存
	2			14.6	9.1	0.7	心葉形	鉄地金鋼表 鍔金具 新留め 皮留め金具遺存
	3		舌葉	8.5	8.6	0.6	心葉形	鉄地金鋼表 鍔金具のみ遺存 新留め
	4		雲珠金具	12.5	6.2	3.5	鉄地金鋼表	足金具は9脚 (うち2脚残存 新留め)
	5		辻金具	9	8.8	2.4	鉄地金鋼表	足金具は4脚 (新留め)
	6			5.9	5.6	2.2	鉄地金鋼表	足金具は4脚 (脚は全て欠損)
	7		引手鍔金具	7.5	3	0.5	鉄地金鋼表新留め皮金具遺存	
	8			6	0.6	3.4	鉄地金鋼表新留め皮金具遺存	
	9		鉄具	1.5	3.3	0.5	残片のみ	
	10		環状金具	3.4	1		残片のみ	
	11		飾金具	3.2	1.6	0.5	鉄地金鋼表新留め	
	12			3.3	1.5	0.4	鉄地金鋼表新留め	
	13			3.2	1.5	0.5	新留め	
	14			3.7	2.5	0.3	中央に長方形孔	
	15			2.9	2.4	0.3	新留め	

鉄鍔

遺構	番号	図版	種別	全長	鍔身部			頸部			備 考
					長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	
1 号 墳	16	13b	三角	6.9	4.2	3.1	0.4	3.8	0.6	0.5	
	17			5.7	4.7	4.7	0.3	1.5	0.6	0.5	
	18			3	2.5	2.5	0.3	0.6	0.7	0.4	
	19		主頸	8.9	6	6	0.4	2.9	0.3	0.3	
	20			6.4	3	3	0.3	3.4	0.6	0.5	
	21		長頸	4.7	0.2	0.2	0.2	5.5	0.6	0.4	
	22			5.5	3	3	0.3	2.5	0.7	0.5	
	23			6.4	3	3	0.4	3.4	0.6	0.4	
	24		基部	3.6				3.6	0.5	0.3	
	25			5.8				5.8	0.7	0.5	
	26			3.8				3.8	0.5	0.5	
	27			3.9				3.9	0.6	0.4	
	28			3.1				3.1	0.6	0.4	
	29			3.5				3.5	0.5	0.3	
	30			2.7				2.7	0.6	0.4	
31	2.8					2.8	0.4	0.3			
3	3 号 墳	18b		主頸	11.8	8.1	2.8	0.3	3.7	0.5	0.3
2			9.7		8.3	3.1	0.3	1.4	0.3	0.3	
3			7.6		1.4	0.6	0.2	6.2	0.4	0.4	
4			6.7	1.7	0.6	0.2	5	0.5	0.4		
5			8.2	1	0.7		7.2	0.5	0.4		
6			5.8	1.8	0.6		4	0.5	0.4		
7			5.7	1.6	0.6		4.1	0.5	0.4		
8			4.9	1.1	0.6	0.2	3.8	0.4	0.3		
9			2.8	0.9	0.6	0.2	1.9	0.4	0.3		
10			3.1	1.3	0.6	0.2	1.8	0.4	0.3		
11			3.6				3.6	0.4	0.4		
12			2.8				2.8	0.5	0.4		
13			4.3				4.3	0.5	0.3		
14			4.3				4.3	0.4	0.4		
15			3.6	0.7	0.6		2.9	0.5	0.4		
16	4.1				4.1	0.4	0.4				
17	4.3				4.3	0.5	0.4				

その他

遺構	番号	図版	種別	全長	幅	厚さ	備 考
1 号 墳	32	13b	刀子	10.8	5.5	0.6	
	33	13b		4.6	1.2	0.4	
	34		不明	4.6	0.3	0.3	
2号墳		16b	大刀	70.4	2.6	0.7	

第2表 香川県原古墳群出土土器観察表

出土遺構	番号	図版番号	器種	器高 (cm)	口徑 (cm)	底徑 (cm)	胎土	色調	焼成	備考
1 号 墳	1	14	須恵器 杯蓋	2.2	9.6	6.8	径1~2mmの砂粒を含む	灰黄色	堅緻	へう記号あり
	2			2.1	9.8	6.9	径1~4mmの砂粒を含む	灰黄色	堅緻	へう記号あり
	3			2.3	10.5	7.3		灰黄色	堅緻	へう記号あり
	4			3.3	8.4			灰黄色	堅緻	乳頭状のつまみ
	5			3.4	16.2		砂粒を僅かに含む	灰白色	良好	宝珠状のつまみ
	6				16		砂粒を多く含む	青灰色	堅緻	つまみ欠損
	7	14	須恵器 杯身	3	15.8		砂粒を多く含む	青灰色	堅緻	宝珠状のつまみ
	8			2.8	9.6			乳白色	堅緻	磨減が著しい
	9			3.5	10.4	5.3		灰黄色	堅緻	磨減が著しい
	10			4.1	10.2			灰黄色	堅緻	穿孔あり
	11			3.9	11.9	6.5	砂粒を多く含む	黄褐色	堅緻	へう記号あり
	12	3.6	10.9	7		黄灰色	堅緻	へう記号あり		
	13	3.6	9.8	7.1	僅かに砂粒を含む	淡黄色	堅緻	へう記号あり		
	14	3.4	10	5		灰黒色	堅緻	へう記号あり		
	15	4.8	11.5	6.6	砂粒を多く含む	灰黒色	堅緻			
	16	3.8	11.4	6		淡黄色	堅緻			
	17	4.7	14.1	8.7		灰褐色	堅緻			
	18	6.3	14.9	9.8	灰黄色	灰黄色	堅緻			
	19	6.1	16.5	10.6		白灰色	堅緻			
	20	8.7	11.1	13.2	僅かに砂粒を含む	明灰色	堅緻			
	21	7.5	7.3	7.2	僅かに砂粒を含む	暗青灰色	堅緻			
	22	14.4	19.2	9.6		青灰色	堅緻			
	23	3.3	19.2	13.7	1mmほどの白色砂粒を含む	赤褐色	良好			
3 号 墳	1	19	杯身	3.9	14.9		僅かに砂粒を含む	青灰色	堅緻	へう記号あり
	2			4.5	13		僅かに砂粒を含む	灰黒色	堅緻	へう記号あり
	3			5.2	14.2		僅かに砂粒を含む	青灰色	堅緻	
	4		4.3	15.6		僅かに砂粒を含む	青灰色	堅緻	つまみあり	
	5		5.3	15.8		砂粒を多く含む	灰褐色	堅緻	つまみあり	
	6		5	15.4		僅かに砂粒を含む	灰黒色	堅緻	つまみあり	
	7		5.3	15.2		僅かに砂粒を含む	灰黒色	堅緻	つまみあり	
	8		5.3	15.8		径1~2mmの砂粒を多く含む	明黄褐色	堅緻	つまみあり	
	9		4.9	15.8		僅かに砂粒を含む	青灰色	堅緻	つまみあり	
	10		4.5	15.6		僅かに砂粒を含む	灰黒色	堅緻	つまみ欠損	
	11			16.2		径1mmほどの砂粒を含む	灰黒色	堅緻	長脚2段透かし孔	
	12	有蓋高杯		14.1		径1~3mmほどの砂粒を含む	明黄褐色	堅緻	長脚3段透かし孔	
	13				15.9		僅かに砂粒を含む	明灰黒色	堅緻	長脚2段透かし孔
	14	無蓋高杯	14.3	11.6	12.1		僅かに砂粒を含む	灰黒色	堅緻	
	15	提柄	21.3	9				黄褐色	堅緻	
	16	湯のみ	4.7	6.1	3.6			黄灰色	堅緻	
	17	碗	5.7	11.6	4.1				堅緻	
	18	土師皿	3.1	12.8	8.2			赤褐色	良好	

6. 木ノ坂古墳

(1) はじめに

① 調査経過と体制

古墳は、伊都ゴルフ場の造成工事途中で発見された。

調査は、前原町教育委員会の依頼を受けて、福岡県教育委員会文化課が発掘調査を担当した。調査期間は、昭和46年2月5日から2月17日まで。

調査体制（昭和45年度）

福岡県教育委員会	文化課	技師	宮小路賀宏
		技師	柳田康雄
		補助員	丸山康晴・小田雅文

報告書作製（平成12年度）

福岡県教育委員会 文化財保護課長 柳田康雄（現在九州歴史資料館副館長）

なお、土器の実測は平尾和久、トレース作業は太宰府事務所が行った。

② 古墳の位置と環境

古墳は、福岡県前原市大字本字木ノ坂に所在する小円墳である。地形的には、背振山系の雷山（標高855.5m）山麓に広がる丘陵群の鞍部に位置するが、三坂から長野に貫ける旧官道と考えられる北側に伊都ゴルフ場入口があるあたりが最も高く、長野に向かうほど下り坂となる。古墳は、そのゴルフ場の南西端に位置していた。

木ノ坂古墳周辺は、最も近いところで西側約1kmに前期・後期の前方後円墳を含む飯原日明古墳群や南側に初期横穴式石室をもつ鶴ヶ坂古墳群があるが、東側雷山川水系遺跡群と西側長野川水系遺跡群の中間の緩衝地帯で遺跡が希薄な地域であった（註1）。

ところが、本古墳の調査と昭和49年度からの三雲遺跡群の調査をきっかけとして周辺の分布調査を実施したところ、隣接した南側から西側の独立丘陵で日明13号・16号・17号の3基の小型前方後円墳が発見できた（註2）。

註1 原山大六『前原町文化財地名表』前原町教育委員会 1974

福岡県教育委員会『福岡県遺跡等分布地図（糸島部編）』1981

註2 柳田康雄『三雲遺跡Ⅲ 糸島の古墳文化』『福岡県文化財調査報告書』63 1982

(2) 古墳の調査

① 墳丘（第44～46図）

古墳は、墳丘の中央に大きな盗掘坑があり、一見して横穴式石室であることが解った。したがって、現況の地形測量後に、盗掘坑をさらえて石室の方向を確認し、石室の主軸を基準に割付けてトレンチを設定した。

古墳は、西側から南側を見下ろす標高100mの丘陵尾根上に独立して営まれていた。墳丘は、東



第44図 木ノ坂古墳現況墳丘実測図 (1/200)

西に延びる丘陵を丘尾切断するようにして西側の周溝で切離している。墳丘規模は、周溝内側裾で計測すると東西径14mであり、西側に基道を設けている。

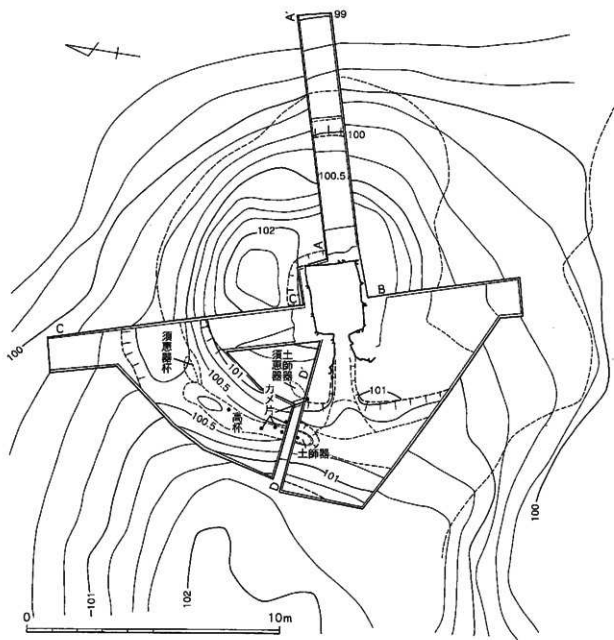
墳丘は、第46図の墳丘断面図で明らかなように、花崗岩ばいらん土の地山を掘削して設けた周溝の内側に盛土による段築を設定している。すなわち、2段築成の墳丘をもつ古墳である。盛土は、石室の裏込を充填した後に割合おおまかに築造している。

墳丘の高さは、周溝底から北側で1段目が1.45m、現存最高2.15m、東側で1段目が0.8m、現存最高2.2mである。

墳丘からの出土品は、墓道北側の盛土下の地山直上に須恵器・蓋杯、上師器杯が一括して置かれ、墳丘盛土前の祭祀用と考える。その他の土器は、西側から北側の周溝底に一括して置かれたものや散乱して出土した。

② 主体部 (第47図)

主体部は横穴式石室で、西側に開口している。石室は、亀甲状の亀裂をもつ在地の石材を使用した羽子板状平面形をもつ単室横穴式石室である。基底部は、腰石として石材を立てるものもあるが、奥壁などに平積みもあり、一定していない。腰石から上の積み方は、割合垂直な築造である。しか



第45図 木ノ坂古墳墳丘実測図 (1/150)

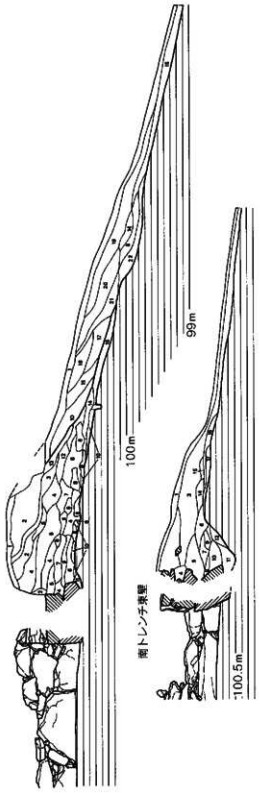
し、壁面の保存の良いところで約1mほどしか残っていないし、天井石も付近では見当たらなかった。

玄門部は、袖石に特別大きな石材を使用していないが、樞石1個を置いている。羨道部は、八字形に開き、玄室と比較すると割合小型の石材で平積みをしている。

石室の規模は、全長4.4m、玄室長2.35m、奥壁幅2m、玄門側幅1.85m、玄門幅60cmであり、高さが不明。

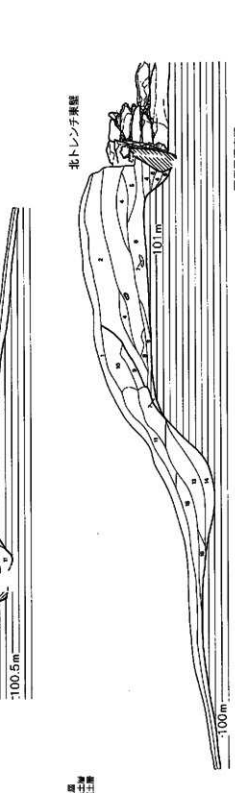
玄門は、高さ70cmの1個の石材を立てて塞ぎ、羨道を小ぶりの石材で積めている。

東トレンチ北壁



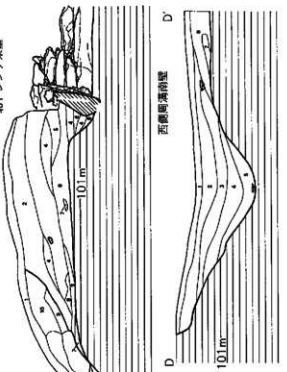
- 東トレンチ北壁土層名
1. 赤土層(フシコ土を含む)
 2. 赤褐色土層
 3. 暗赤色土層
 4. 暗褐色土層
 5. 暗褐色土層
 6. 暗褐色土層(フシコ土を含む)
 7. 暗褐色土層(フシコ土を含む)
 8. 暗褐色土層(フシコ土を含む)
 9. 暗褐色土層(フシコ土を含む)
 10. 暗褐色土層(フシコ土を含む)
 11. 暗褐色土層
 12. 暗褐色土層
 13. 暗褐色土層
 14. 暗褐色土層(フシコ土を含む)
 15. 暗褐色土層
 16. 暗褐色土層
 17. 暗褐色土層
 18. 暗褐色土層
 19. 暗褐色土層
 20. 暗褐色土層
 21. 暗褐色土層
 22. 暗褐色土層

東トレンチ東壁



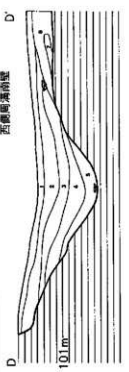
- 東トレンチ東壁土層名
1. 赤土層(フシコ土を含む)
 2. 暗褐色土層
 3. 暗褐色土層
 4. 暗褐色土層
 5. 暗褐色土層
 6. 暗褐色土層
 7. 暗褐色土層
 8. 暗褐色土層
 9. 暗褐色土層
 10. 暗褐色土層
 11. 暗褐色土層
 12. 暗褐色土層
 13. 暗褐色土層
 14. 暗褐色土層
 15. 暗褐色土層
 16. 暗褐色土層
 17. 暗褐色土層

北トレンチ東壁



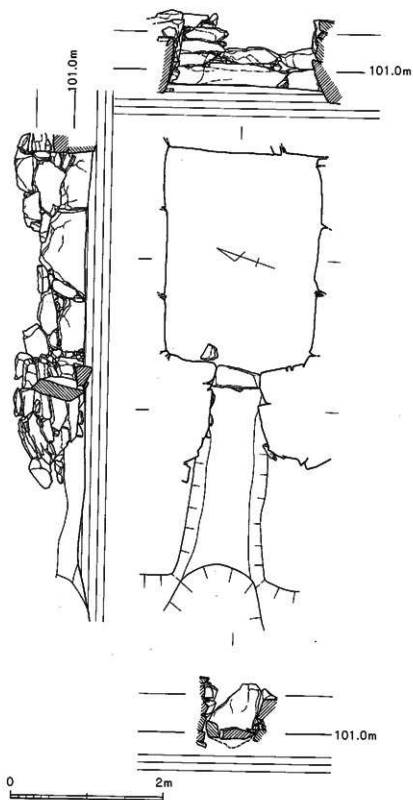
- 北トレンチ東壁土層名
1. 赤土層
 2. 暗褐色土層
 3. 暗褐色土層
 4. 暗褐色土層
 5. 暗褐色土層
 6. 暗褐色土層
 7. 暗褐色土層

西側調査断面



- 西側調査断面土層名
1. 赤土層
 2. 暗褐色土層
 3. 暗褐色土層
 4. 暗褐色土層
 5. 暗褐色土層
 6. 暗褐色土層
 7. 暗褐色土層





第47図 木ノ坂古墳石室実測図 (1/50)

③ 出土品

古墳からは、石室内の攪乱土中から鉄鏃1本、墳丘盛上下から須恵器と土師器の一拵品、周溝底から須恵器・土師器・弥生土器・砥石が出土した。

鉄器 (第48図)

石室内唯一の出土品として鉄鏃1点がある。鉄鏃は、頸部を欠損しており、現存全長5.2cm、復原最大幅3.6cm、身厚さ3mm弱、頸部幅1.05cm、厚さ2mmの大きさである。形式は、有茎式平造で逆刺閥をもつ脇扶三角形鏃群に属する(註1)。逆刺部は、先が丸くみえるが、本来は尖っていたかもしれない。

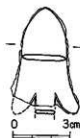
須恵器 (第49・50図、第3表)

須恵器は、墓道北側墳丘盛土内と周溝底から出土している。墳丘内から出土しているのは、蓋杯の3・9・10・12・13・16・17・21と甕の23である。

蓋杯は、第49図の1~16が大きさや焼成具合から見た蓋と身のセットであるが、9・10のセット以外の3・12・13・16が周溝底出土品との間にセットがみられる。したがって、墳丘築造時の祭祀と周溝底出土品には時期差がないものと考えられる。

蓋杯は、蓋の口縁部が直立することや身の口縁部立上がりが高いことから、古式の様相を残すが、20・21のように湾曲して立上がる比較的新しいものまでである。蓋と杯は口縁部の内側を面取状にするもの(6~10)、そこに沈線状のくぼみをもつもの(1~3・5・18・19)、内側に沈線を廻らすもの(4・13~15)などがある。胎土には、砂粒や黒色粒を多く含むものが多い。

第49図の蓋杯は、古式の様相を残すと考えられる順に並べてみた。



第48図 出土鉄器実測図 (1/2)

第3表 須恵器蓋杯一覧表

(単位 cm)

番号	名称	器高	口径	調整	胎土	色調
1	蓋	4.5	12.9	回転ヘラケズリ、ヨコナデ	砂粒・黒色粒含む	青灰色
2	杯身	4.9	11.6	回転ヘラケズリ、ヨコナデ	砂粒・黒色粒含む	淡青灰色
3	蓋	4.5	13.9	回転ヘラケズリ、ヨコナデ	砂粒・黒色粒含む	灰色
4	杯身	4.3	12.0	回転ヘラケズリ、ヨコナデ	砂粒・黒色粒含む	淡青灰色
5	蓋	4.2	13.7	回転ヘラケズリ、ヨコナデ	砂粒・黒色粒含む	淡青灰色
6	杯身	4.7	12.1	回転ヘラケズリ、ヨコナデ	砂粒・黒色粒含む	淡青灰色
7	蓋	4.9	13.4	回転ヘラケズリ、ヨコナデ	砂粒・黒色粒含む	青灰色
8	杯身	5.1	11.8	回転ヘラケズリ、ヨコナデ	砂粒・黒色粒含む	青灰色
9	蓋	4.4	13.8	回転ヘラケズリ、ヨコナデ	砂粒・黒色粒含む	青灰色
10	杯身	4.9	11.7	回転ヘラケズリ、ヨコナデ	砂粒含む	青灰色
11	蓋	4.6	14.2	回転ヘラケズリ、ヨコナデ	砂粒・黒色粒含む	白黄・灰色
12	杯身	4.2	11.8	回転ヘラケズリ、ヨコナデ	砂粒・黒色粒含む	青灰色
13	蓋	4.4	14.2	回転ヘラケズリ、ヨコナデ	砂粒・黒色粒含む	緑灰・淡青灰色
14	杯身	5.0	12.4	回転ヘラケズリ、ヨコナデ	砂粒・黒色粒含む	淡青灰色
15	蓋	4.3	13.4	回転ヘラケズリ、ヨコナデ	砂粒・黒色粒含む	青灰・紫灰色
16	杯身	5.4	11.2	回転ヘラケズリ、ヨコナデ	砂粒含む	青灰・淡紫色
17	蓋	5.0	13.0	回転ヘラケズリ、ヨコナデ	砂粒・黒色粒含む	青灰色
18	杯身	4.9	11.9	回転ヘラケズリ、ヨコナデ	砂粒含む	青灰色
19	杯身	4.1	11.9	回転ヘラケズリ、ヨコナデ	砂粒・黒色粒含む	淡灰色
20	杯身	4.5	12.1	回転ヘラケズリ、ヨコナデ	砂粒・黒色粒含む	青灰色
21	杯身	4.3	11.8	回転ヘラケズリ、ヨコナデ	砂粒・黒色粒含む	青灰色

高杯(22)は、北西側周溝底から出土した。器高12.3cm、口径10cm、頸部径3cm、脚部裾径7.8cmの大きさである。杯部外面に一条の沈線を廻らし、脚部に縦長の一段透かし窓3個をもつ。胎土は、灰かぶりの灰色を呈し、砂粒と黒色粒を含む。

甕(23)は、墓道北側の墳丘内から出土した完形品。器高12.8cm、口径12.5cm、頸部径6cm、胴部最大径10.1cmの大きさ。器形は、口縁部が低く大きく開くことから、古式の様相を呈するが、胴部の文様がカキ目である。胴部下半は、タタキ後に不定方向のケズリとナテ調整されている。胎土は、灰かぶりで青灰色を呈し、砂粒・黒色粒を含む。

広口壺(24・25)は、北側周溝底から蓋杯と一括して出土した(図版24-2)。24は、器高26cm、口径17.2cm、胴部最大径23.7cmの大きさの中型壺。球形胴部に大きく開く口縁部をもち、口唇部が折返したような厚みをもつ。器面調整は、口縁部がヨコナテ、胴部内外面がタタキ目であり、胴部と口縁部の接合面が明瞭に観察できる。胎土は、頸部外面に×印のヘラ記号がある。

25は、器高20.7cm、口径14.1cm、胴部最大径18.9cmの大きさの中型壺。器形は、球形胴部と大きく開く口縁部に断面三角形の口唇部をもつ。器面調整は、口縁部がヨコナテ、胴部内外面にタタキ目後、外面上半にカキ目が施されている。胎土は、淡灰色と暗青灰色を呈し、口縁部内側と胴部に灰かぶりが見られる。

須恵器は、甕・高杯の器形で明らかのように、須恵器編年のⅡ型式に属する(註2)。蓋杯では、1から21の間に若干の型式差が見られ、Ⅲa型式に含まれるものもある。

土師器(第50図、第4表)

26は、墓道から前面周溝内に散乱していた中型壺である。復原器高15.3cm、口径13.6cm、胴部最大径20.2cmの大きさ。扁平な胴部に強く外反する口縁部をもち、内面がヘラケズリ、口縁部が内外面ヨコナテ、胴部外面がタタキ後に粗いナテ調整が施されている。胎土は、褐色を呈し、大粒赤褐色粒を含む。

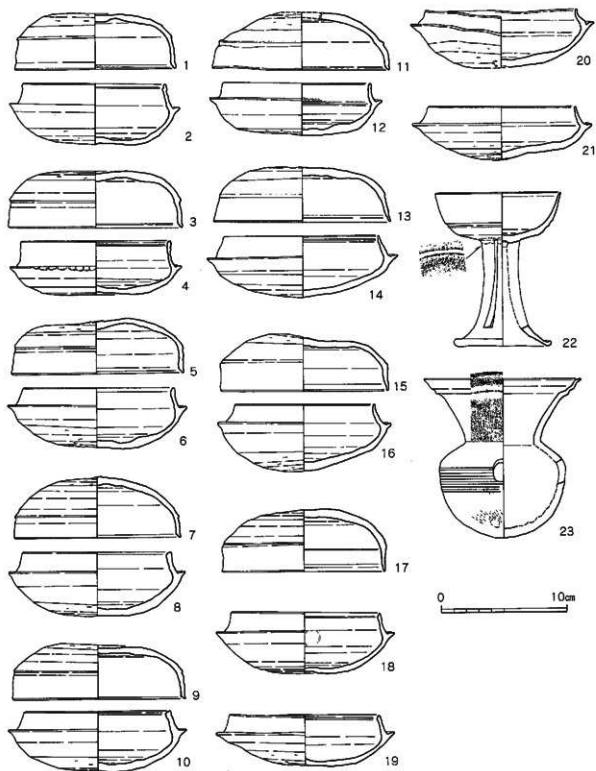
27~33は、墓道北側墳丘内で須恵器と一括出土した土師器杯。27~29は蓋であるが、30・31の杯身とのセット関係が不明である。

33は、西側周溝底出土の土師器杯。

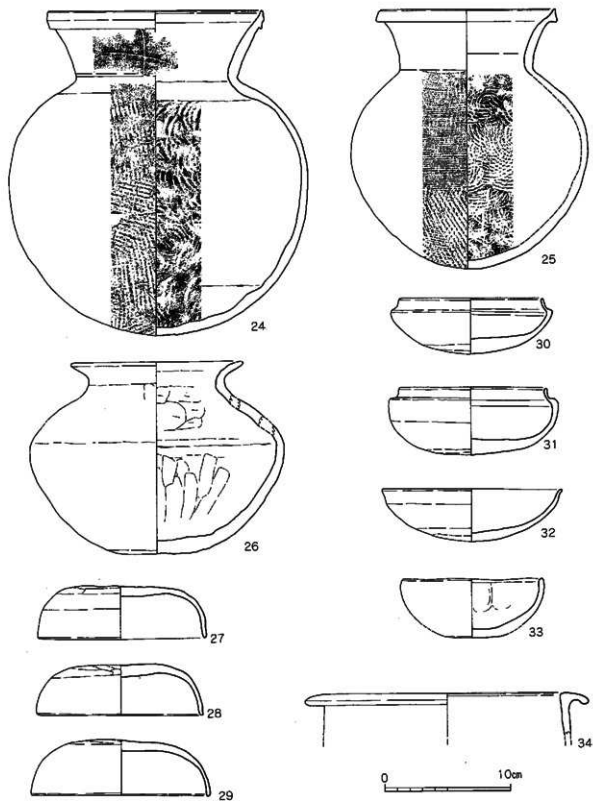
第4表 土師器杯一覧表

(単位 cm)

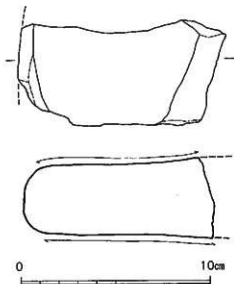
番号	名称	器高	口径	調 整	胎 土	色 調
27	蓋	4.2	13.3	手持ちヘラケズリ、ヨコナテ	砂粒含む	明褐色
28	蓋	4.1	13.1	手持ちヘラケズリ、ヨコナテ	砂粒含む	赤褐色・褐色
29	蓋	4.4	14.1	手持ちヘラケズリ、ヨコナテ	砂粒・赤褐色粒含む	赤橙・褐色
30	杯身	4.5	11.3	手持ちヘラケズリ、ヨコナテ	砂粒・赤褐色粒含む	明褐色
31	杯身	5.4	11.7	手持ちヘラケズリ、ヨコナテ	砂粒・黒色粒含む	淡黄褐色
32	杯	4.2	14.4	手持ちヘラケズリ、ヨコナテ	砂粒含む	赤褐色
33	杯	4.8	11.3	ナテ	砂粒・赤褐色粒含む	明褐色



第49図 木ノ坂古墳出土土器実測図1 (1/3)



第50図 木ノ坂古墳出土土器実測図2 (1/3)



第51図 木ノ坂古墳出土石器実測図 (1/2)

砥石 (第51図)

砥石は、北側周溝から出土した砂岩系で赤褐色を呈している。両面を砥石として使用しているが、3面が欠損している。古墳に伴うものではなく、弥生時代であろう。

弥生土器 (第50図34)

34は、口径22.6cmの逆L字形口縁部の中型甕である。ヨコナデ調整されている。弥生中期前半のものであろう。調査地区内では、弥生の遺構は発見できなかった。

(3) まとめ

木ノ坂古墳は、これまでの研究では単室の横穴式石室で、八字形に開く羨道部をもち、須恵器のⅡ式を副葬することから6世紀初頭に位置づけられる。

しかし、糸島地域は、福岡市西区鶴崎古墳(註3)のように4世紀後半に初期横穴式石室が出現し(註4)、丸隈山古墳(註5)や前原市狐塚古墳(註6)のように初期横穴式石室が継続して用いられている。鶴崎古墳の年代観は、古墳の出現を3世紀初頭とし、三角緑神獣鏡の年代を3世紀中頃から後半とすることから(註7)、これまでより半世紀古く位置づけ、丸隈山古墳と狐塚古墳も5世紀初頭まで上らせることが可能となる。

また、須恵器の出現は、これまではⅠ式が5世紀後半とされていたが、九州でも初期須恵器の存在が明らかになり、その年代も5世紀前半以前とすることが可能になった(註8)。この年代も三角緑神獣鏡の年代観が上れば多少影響を受けることからさらなる検討が必要となる。

したがって、木ノ坂古墳は、若干古く上らせることも可能で、5世紀末前後に位置づけたい。

註

註1 杉山秀宏「古墳時代の鉄鏡について」『橿原考古学研究所論集』8 1988

註2 小田高士雄「九州考古学研究 古墳時代篇」学生社 1979

註3 柳沢一男「鶴崎古墳」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』112 1984

註4 柳田康雄「伊都国の繁栄(下)」『西日本文化』346 1998

註5 下条信行編「丸隈山古墳」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』10 1970

柳沢一男「丸隈山古墳Ⅱ」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』146 1986

註6 柳田康雄他「曾根遺跡群」『前原市文化財調査報告書』7 1982

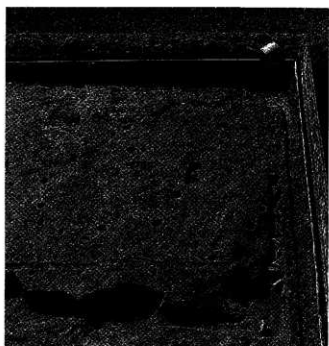
註7 柳田康雄「伊都国を掘る」大和書房 2000

註8 柳田康雄「諸田塚遺跡Ⅲ 3朝倉窯系初期須恵器」『一般国道3号筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告』5 1998

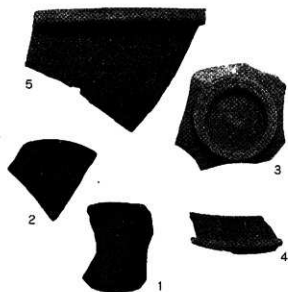
版 图



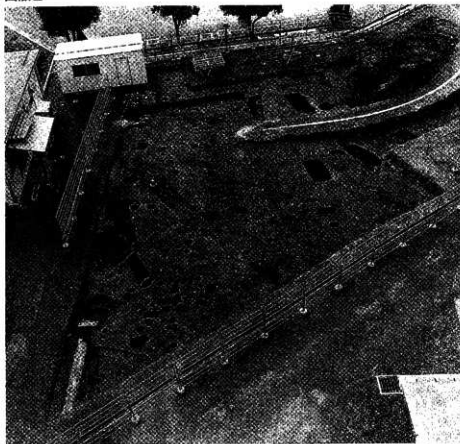
a. 蔵持寺ノ前遺跡全景 (西から)



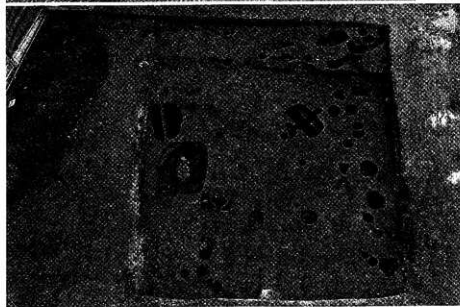
b. 掘立柱建物 (北から)



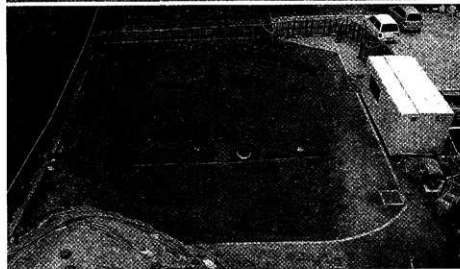
c. 出土遺物



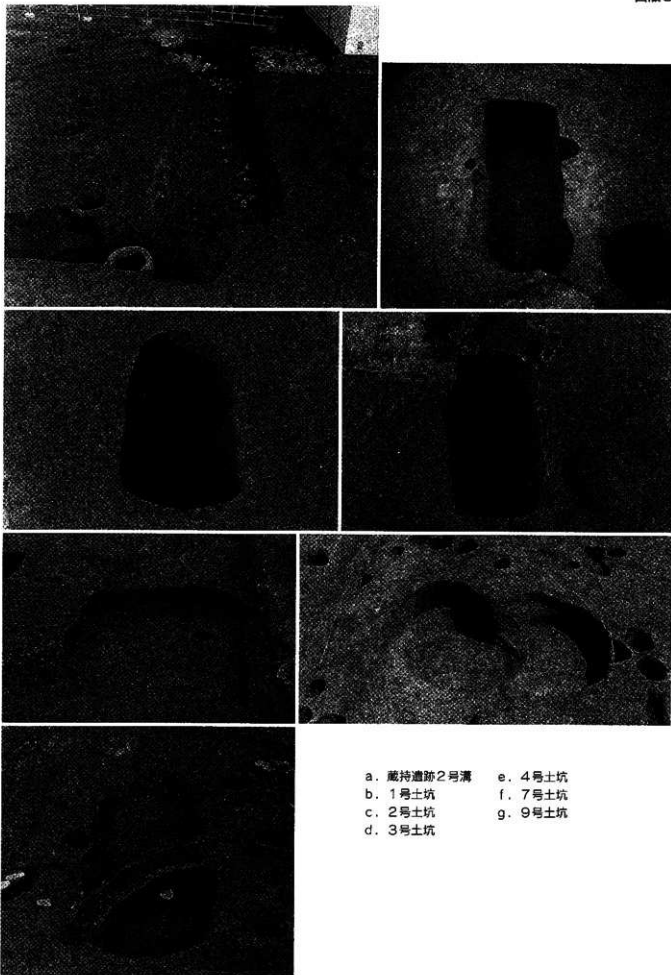
a. 蔵持遺跡第1地区全景
(北から)



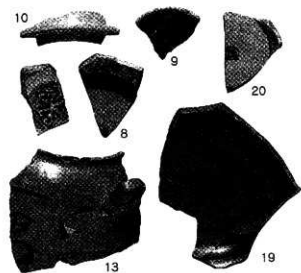
b. 蔵持遺跡第2地区全景
(北から)



c. 蔵持遺跡第3地区全景
(北から)



a. 藏持遺跡2号溝 e. 4号土坑
 b. 1号土坑 f. 7号土坑
 c. 2号土坑 g. 9号土坑
 d. 3号土坑



11



14



15



16



18



24



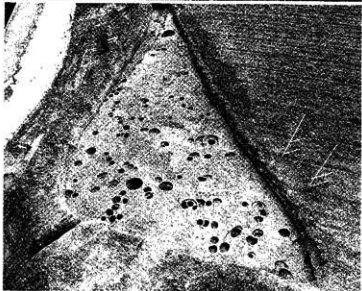
17



a. 多久柿原遺跡第Ⅰ地区全景
(西から)



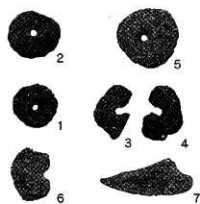
b. 多久柿原遺跡第Ⅱ地区全景
(西から)



c. 富長浦遺跡全景 (北から)



a. 多久柿原遺跡第I地区1号住居



8

b. 多久柿原遺跡第I地区1号住居出土遺物



c. 多久柿原遺跡第II地区土坑および出土遺物



a. 多久元多久遺跡全景 (北から)



b. 火葬土坑



c. 紡錘車

9



7



6

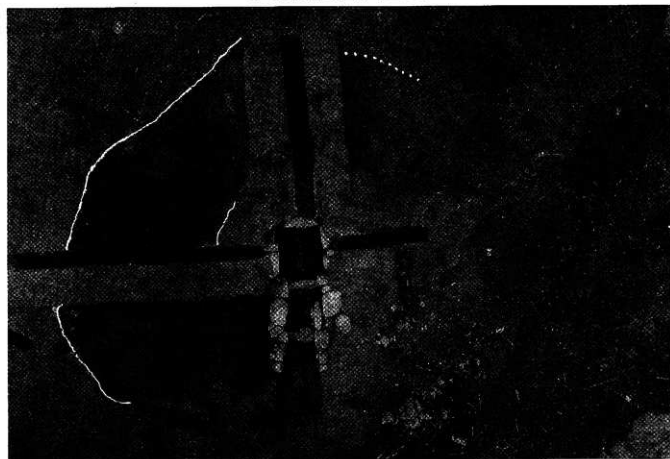


5

d. 出土土器



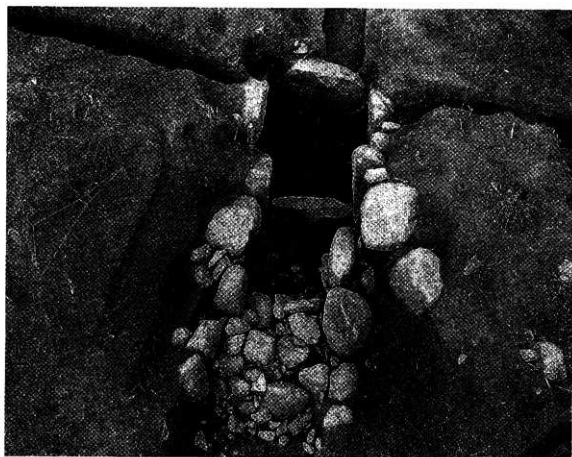
a. 豊力槐原遺跡全景（直上から）



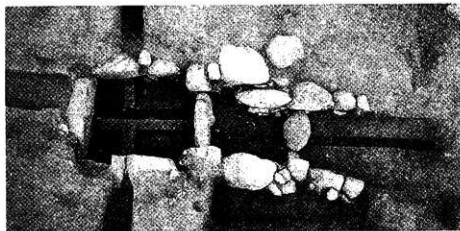
b. 豊力槐原1号墳全景（直上から）



a. 香力槐原1号墳近景（西から）



b. 香力槐原1号墳羨道部閉塞状況（直上から）



a. 香力梶原1号墳石室全景（上から）



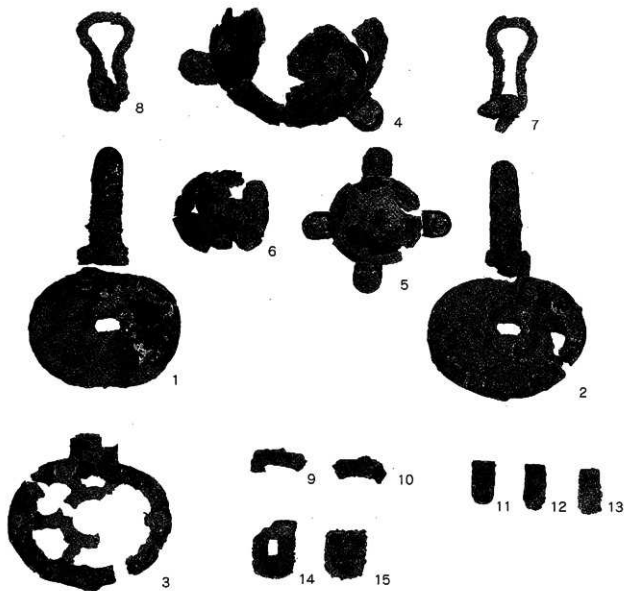
b. 香力梶原1号墳石室右壁



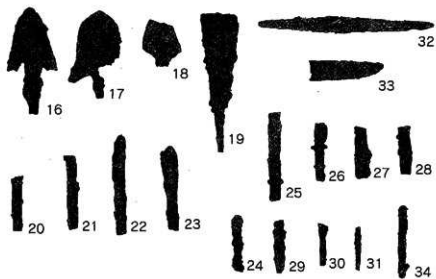
c. 香力梶原1号墳石室右壁



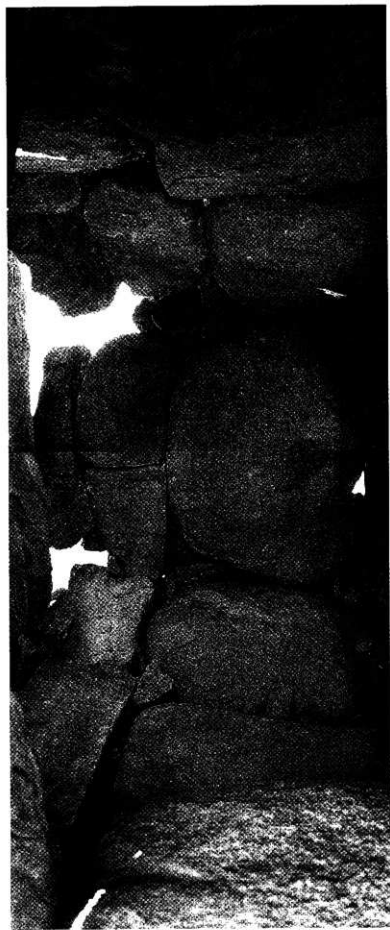
d. 香力梶原1号墳石室左壁



a. 香力権原1号墳出土馬具



b. 香力権原1号墳出土鉄器その他



a. 香力嘎原2号填石室



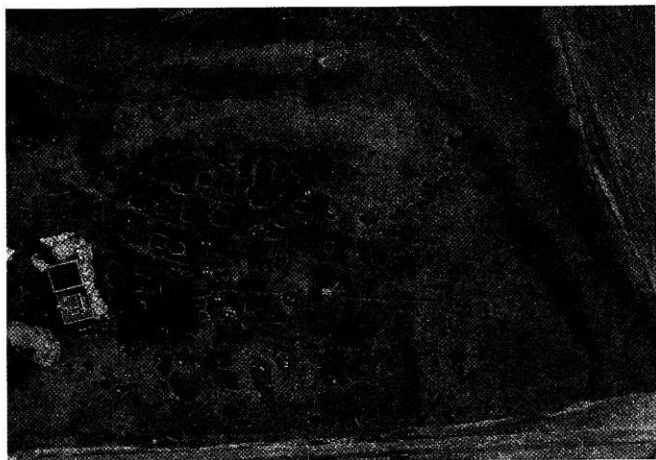
b. 香力嘎原2号填出土大刀



a. 香力梶原3号墳全景 (北西から)



b. 香力梶原3号墳填丘土層 (A-B'背面)



a. 香力槐原遗址A区土坑群

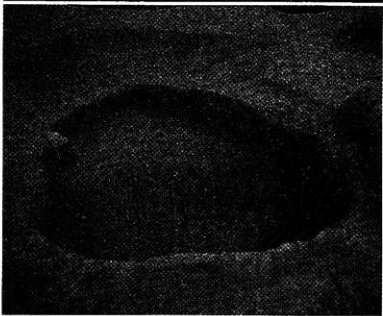


b. 香力槐原遗址B区土坑群

a. 1号土坑



b. 2号土坑



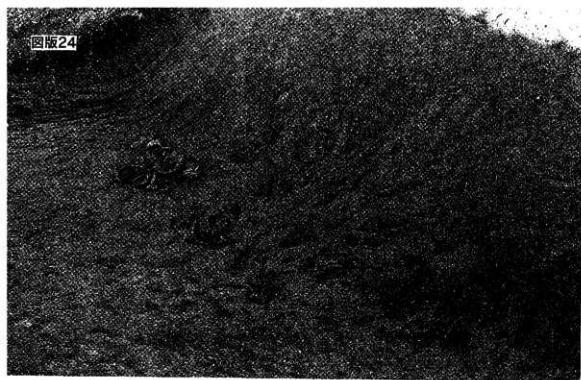
c. 3号土坑



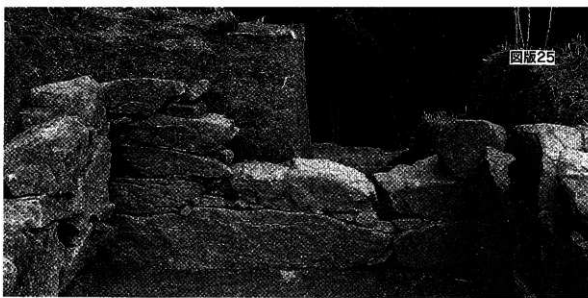
1 木ノ坂古墳北側周溝土器出土状態（西から）

2 北側周溝土器出土状態

3 北から西側の墳丘と周溝（北から）



1 木ノ坂古墳石室奥壁



2 石室玄門

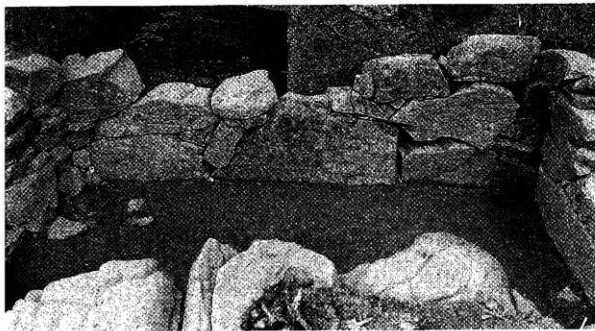


3 石室墓道(西から)

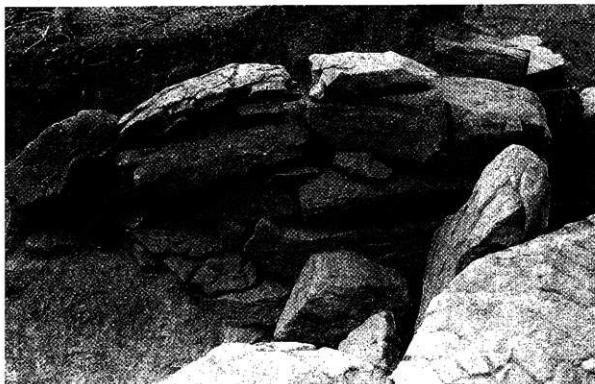




1 木ノ坂古墳石室側壁



2 石室北側壁



3 羨道北側壁

報告書抄録

ふりがな	たくがわりゅういきのいせきぐん							
書名	多久川流域の遺跡群							
副書名	福岡県前原市多久川流域における埋蔵文化財調査報告							
巻次								
シリーズ名	前原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第79集							
著者名	江野道和、岡部裕俊、林 寛、柳田康雄							
編集機関	前原市教育委員会							
所在地	福岡県前原市前原西一丁目1番1号							
発行年月日	西暦2002(平成14)年3月29日							
保管場所	〔写真〕〔図版〕〔遺物〕		前原市立伊都歴史資料館					
保管場所所在地	福岡県前原市大字井原916番地							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
多久川流域の遺跡群	福岡県前原市 大字多久字元多久、榑原 大字蔵持字寺ノ前 大字香力	40222		33° 32' 33" ~30' 31"	130° 11' 52" ~12' 42"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
蔵持寺ノ前遺跡	集落	中世	竪立柱建物、溝		土師皿、陶磁器			
蔵持遺跡	墓地 集落	弥生時代、 中世、近世	墓柏藪、土坑、溝		雙槍、石鍋、土師皿、鞆羽口、 瓦、陶磁器			
多久榑原遺跡	集落	弥生時代、 近世	竪穴住居、溝		紡錘車、弥生土器片			
富長津遺跡	集落		柱穴					
多久元多久遺跡	墓地 集落	弥生時代、 中世	火葬土坑		弥生土器、紡錘車、土師皿			
香力榑原古墳群	墓地	古墳時代、 中世	円墳、土坑		須恵器、鉄器、馬具、装身具			
水ノ坂古墳	墓地	古墳時代	円墳		須恵器、鉄器			

多久川流域の遺跡群

前原市文化財調査報告書 第79集

2002年3月31日

発行 前原市教育委員会
福岡県前原市前原西一丁目1番1号
TEL. 092-323-1111

印刷 (株)重富印刷
福岡県前原市前原東三丁目1番8号
TEL. 092-322-0191 FAX 092-324-2661

